
飛ばされて西の果て！？～第4274独立魔装小队奮闘記～

金子カズミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛ばされて西の果て！？～第4274独立魔装小队奮闘記～

【Nコード】

N2374V

【作者名】

金子カズミ

【あらすじ】

私の名前は坂下サクヤ。皇国軍第4274独立魔装小队隊長を務めています。

問題兵ばかりの小隊ですが、お国のためにその責務を果たします！

…でも、いきなりこれはひどいと思います…。

事故で西の果てに飛ばされた第4274独立魔装小队！

目指せ祖国。薙ぎ払え魔物の群れ！…って、魔物弱すぎない？

このお話は、事故で世界の西の果てに飛ばされて、東の果ての祖国目指して奮闘する物語です！どちらかというと無双系コメディ物になると思います。書きだめ無し、不定期投稿！…最悪なのでね…。

いきなり大ピンチ！（前書き）

別の連載があるのに、また衝動的に始めてしまいました…

今回も書きだめ無し、大まかな流れも無しな見切り発車なのです！

…我ながら、最低なのです…。

いきなり大ピンチ！

皇国。

周囲を荒れた海と強力な魔物の領域に囲まれた孤高テリトリの国家。

縄張りを奪われたはぐれ魔物が常に国土を脅かす。それゆえに、それに対処する国軍の戦力は絶大なものがある。

国軍の任務は大きく分けて二つ。

一つは、他国の侵略に対処する事。だが、周囲の荒れた海と強力な魔物が障壁となつて、建国以来一度もそのような事態を迎えた事はない。

二つ目は、魔物への対処。これは現実的なものがある。大型の魔物が防衛識別圏に巣を築くような事があれば、早期にそれを殲滅する必要があるし、時に魔王級の魔物が勢力争いに敗れて、配下の魔物とともに国土に押し寄せて来る事もある。

こういった戦いを通じて、軍の戦力は極めて高度に保たれていた。しかし、何事にも例外はある。

この物語は、そんな落ちこぼれ魔装小隊の笑いと感動？の物語である。

「みんな、準備はいい？」

オリハルコン製の魔法機杖を持ち、第4274小隊を率いる女性魔法士官が配下の全員に確認する。

「…大丈夫…」

まず答えたのは、アダマントを軸にミスリルのコーティングの施

された、身長よりも長い大型の魔法機杖を抱えた銀髪の少女である。名前は水城サキ。結界魔法の第一人者として知られていたが、自分の作った結界に引きこもるという迷惑な性質を持っている。不眠症気味でもあり、今も目の下に巨大なクマを作り前後左右にふらふら揺れている。本当に大丈夫か？

「私も問題ない」

ハスキーボイスで答えたのは、肩までのセミロングの凛々しい魔法剣士。名前は加藤アキラ。出雲の地で作られる最高級の玉鋼を原料にした長めの刀を構えている。その刀身にはヒビロカネの装飾があり、魔力伝達率の向上に寄与している。

…この剣士、見た目は完全に凛々しい女性剣士だが、実際は男である。かつて第一師団の剣術師範まで上り詰めながら、ある事件で女装のよさに目覚めてしまいこの部隊に転属^{させん}させられた。

「回復^{ヒール}は任せて下さい！」

明るく言ったのは緑色の髪の幼い少女。名前は守谷サツキ。千年に一人の天才支援魔導師と言われ、僅か七歳で第一師団の後衛回復要員に選ばれた天才少女。

だが、かつて大隊級魔物の侵攻を受けた際、隠していた二重人格が発動。味方の回復支援を放棄し、一人でこの魔物に突っ込むという暴挙に及んだ。

サツキのこの行動のせいで戦線は崩壊。結局サツキ一人で相手の魔物を始末してしまった（！）からよかったものの、あと一步で皇都へのエネルギー供給の一大拠点である大規模魔力炉が破壊されるところだった。

これ以来、サツキのあだ名は『バーサーク・ヒーラー』に確定。やはりこの部隊に飛ばされた。

「帰ったら私の相手をしてくれない？もちろん下のね？」

いきなり下ネタに走るのは、攻撃魔法の大家、橘アケミ。貴族出身で、かつては近衛師団の皇女殿下直属親衛隊に所属していた事もある女性魔導師である。

実は、同性愛者であり、皇女殿下をその毒牙にかけるという前代未聞の暴挙に及んだ、真実自らの欲求に忠実な女である。

本来なら不敬罪で死刑だが、皇女殿下本人の必死のとりなしもあって（一体何があつたんだ！）この部隊に飛ばされた。

「いい加減にしないで！実戦なのよ！」

そして、それに真面目に反応しているのが、部隊長、坂下サクヤ。持っているオリハルコン製の機杖は魔法学校成績上位者に与えられる恩師の法杖であり、その事からもサクヤが優秀な魔導師である事は間違いない。

それなのに、なぜこんな部隊の指揮官なのか？

理由は、その不運体質と間の悪さだった。

魔法士官学校の試験では満点をとって入学式で新入生代表として挨拶することになっていたが、前日に学校へ向かう乗合馬車が脱輪それも二回。結果として、寮の門限に遅刻したサクヤはその夜を営倉で過ごし、そこを出た足であいさつするという前代未聞の事態に陥った。

当然、来賓のお偉いさんは激怒。こんな奴が新入生代表とは情けない、と口々に罵った。

早速上層部の顰蹙を買ったのである。

その後も、その身の不運体質が不運を呼び寄せ続け、結局、士官学校卒業時点で、営倉入り三十七回、重営倉七回という前人未踏の大記録を打ち立て『営倉の住人』と呼ばれるようになっていた。

魔法学校で恩師の法杖をもらいながらこの有様とは、信じがたいものだった。

結局、サクヤは問題兵を寄せ集めた独立魔装中隊の指揮官になってしまった。

しかし、一度拝命したからには、サクヤもやる気十分である。全員に作戦を再度説明する。

「今回の目的は、この洞窟の中にいると思われる小型の飛竜の掃討だ」

五人の目の前には、黒い巨大な洞窟がぽっかりとその口を開けている。

「前衛はアキラとアケミ。中衛は私。後衛はサツキとサキ。サキは一応緊急脱出の転移魔法を準備しといてくれ」

その指示に、全員がうなづく。

「よし！では、これより飛竜の掃討任務を開始する！」

「「「了解！」「」」」

その頃。皇都 独立魔装中隊本部

「ん？これってあいつらに言ってたかの？」

木造平屋の倒壊寸前の隊舎。

本来なら中隊規模で使用されるはずだが、第4274独立魔装小

隊が所属する事から他の隊が所属する事を嫌がり、結果として中隊と言いながらも実際は小隊の専用宿舎と化している。

留守を受け持っているのは、補給関連の事務官と中隊長のボケじい。かつては最前線で大活躍していた名将だったが、寄る年波には勝てず、ここで隠居老人のような生活を行っている。

その手には一枚の命令書。

その内容は、飛竜と思しき飛行系魔物が発見された洞窟の調査を命じてある。

その注釈には、近隣で繁殖期を迎える大型飛行種を警戒するように、特にもしそれが巣だったら絶対に手出ししないように記されていた。

飛行種の名は『炎龍』特にその中でも名前がつけられている長命種『従三位南天死炎龍』通称『炎王』

間違いなく、魔王級の怪物だった。

「ま、いつか」

それをあつさりと無視する中隊長。

そのまま中隊本部はお茶会に突入した。

サクヤの不運特性の一つ。徹底的に上官に恵まれないがここで発動されてしまった。

もちろん五人は、この事実を知る由もなかった。

「キヤー！なんなのよこれは！」

「知るか！叫ぶより魔法撃て！」

洞窟に突入した五人の目の前に展開された光景。

周りに、孵化したばかりの炎龍炎龍炎龍。

生まれながらに狩猟本能は健在の様で、よたよたとおぼつかない足取りで五人に向かって迫ってきた。

周囲には、まだ蠢いている卵が無数にある。

さっきの叫びは、それを正面から受け止めている前衛のアキラとアケミだった。

アキラは必死に冷気を纏わせた刀を振り回し、その隣でアケミが魔力カートリッジを湯水のように使いながら攻撃魔法を連発している。

「あーもう！私専門が火系魔法なのに、こいつら炎龍じゃ効かないじゃないの！」

「サクヤさん、どうするんですか！？」

アケミの悲鳴を受けて、即座に回復魔法を連射しながらサツキがサクヤに切羽詰まった様子で問いかける。どう考えても小隊の処理能力を超えている。

「いや、後退しないといけないのは分かるんだが、何か忘れてる気がする……」

「そんな事はどうでもいいからさっさと後退させる！」

何かためらっているサクヤに、アキラが怒鳴る。もちろんその間も握った刀で敵を切り裂き続けている。

「だけど……！」

そういうサクヤも、敵のど真ん中に中規模凍結魔法を放つ。直撃を受けた雛（雛とは言っても体長二メートルを超えている）が、一

撃で凍結してバラバラに砕ける。周囲にも凍結の余波をもたらし、動きが鈍り後続の動きを阻害する。

「あーもう、言い加減もたないわ！後退させないと後玉よ！」
うしろだま

ついでに、後玉は戦場で味方の背中を撃つ、つまり裏切りと言う事である。無能な上官に対する、部下の最終兵器である。

「……わかった。全員、洞窟の出口に向け陣形を維持して後退！サキが先導しろ！」

何か引つかかる物を感じながらも、後退の必要性は感じていたのととうとうサクヤが指示を出す。

指示を受け、陣形を維持したまま後退する小隊。近づいてくる敵はアキラが切り伏せ、視界に入る物にアケミは片っ端から『氷槍』フリージング・ランスを放つ。その頭越しにサクヤが中規模凍結魔法『氷床』アイス・フロアを放ち、足を地面に縛り付ける。その全員にサツキが回復魔法をかけ続けている。

「みんな、まもなく出口だ！」

サクヤの言葉に、奮起する三人。

その時、サキの小さな、それでいて不思議と耳に響く不吉な呟きが響いた。

「あ、やばい」

次の瞬間、出口の光が巨大な何かに遮られた。

「……」

沈黙する小隊。

それはまるで、巨大な山のような龍だった。

広げた翼は五十メートルを優に超え、胴体は一枚一枚が人の顔より大きい、頑丈そうな鱗で覆われている。

目はルビーのような赤を宿し、口元からは漏れ出る火の粉が吹きだしている。

背後には、二回りほど小柄な龍を数体従えている。

「『炎王』……！」

士官学校で暗記させられた識別表。そこに載っていた魔王級魔物。軍が総力を挙げて対応すべき本物の化け物。

「……サキ！ 転移魔法を！」

サクヤが切羽詰まった様子で命じる。

いま使わなくて何のための転移魔法だ！

だが、サキはぼんやりした眠そうな表情で首を横に振る。

「……魔力場が乱れて、場所を確定できない……」

「こんなタイミングで……？」

サクヤの不幸体質。肝心なところで超自然的不運が起こる。本当にバッドタイミングである。

すでに炎龍はブレスの準備を始めている。洞窟の中の我が子の運命は気にならないようだ。まとめて吹き飛ばすつもりである。

「ならそれでもいい！とにかくどこかに転移だ！」

「……分かった……」

次の瞬間、サキの機杖が装填されていた二十発の魔力カートリッジを一瞬で消費、さらに自身の魔力も上乘せして一気に巨大な魔方阵を起動する。

「…転移、実行…」

五人の姿が消えるのと、プレスが放たれるのはほぼ同時だった。

どこに飛ばされた！

「みんな、これからどうする？」

サクヤは集まった四人に尋ねた。

転移先は、完全に不明だった。

転移直後に位置測定のために基準石（常に魔力を放っている石で、索敵魔法で複数の石の方位を調べて、三点法で位置を求める）の方位を調べようとしたが、なぜか反応が無く、周りの地形も見つた事が無かった。

完全に手詰まりである。

だが、幸いだった事もある。

転移した森の目の前に街道があつたのだ。

だが、その街道はまともな舗装もされていない代物で、すでに放棄されている恐れもあった。少なくとも、地図に載っている皇国領内に、こんなひどい道路はない。

しかし、皇国近くの辺境の魔物の領域には未開の民族が住んでいるとも言われている。外の世界には皇国より遥かに巨大な大帝国があるという話も聞いている。

場合によってはそこまで飛ばされている可能性もあった。

そこで、これからの行動を五人で議論していた。

「やはりここは通りかかった人間に場所を聞くのがベストだろう」

まず発言したのは刀を鞘にしまったアキラだ。女装の男と言う事で偏見を持たれているが、中身は普通に男の心を持っているし、その発言もまともだ。小隊の良心の砦その一である。

「攻撃魔法で火を起こせば適当にないか来るんじゃない？」

「却下。お前は森を灰にする気が！」

物騒な意見を言うのはアケミ。この小隊で最も非常識な人間だ。

「なら隊長が何か案を出してよ。出せなかったら食べちゃうから？」
「なっ！」

いきなりめちゃくちゃな条件を出してくるアケミ。動揺するサクヤ。この態度がいじられる原因だと、サクヤ本人はまったく気が付いていない。アキラは刀の手入れに入り、このコントを完全にスルーしている。

ついでにサキは自分の結界に引きこもっており、上半身だけ結界に巻き込まれたサツキは水色の半球状の結界から出した足をじたばたして必死に逃れようとしている。サキが左遷させられた理由はこの光景に集約される。

すぐに意見が出ず焦るサクヤだったが、その苦悩は長くは続かなかった。

「おい！商隊キャラバンが見えたぞ！」

アキラの声に、全員が反応する。サキも結界を解除し、不健康そうな顔を見せる。サツキだけは疲れ果ててぐったりしている。

商隊は大型の幌馬車が三台と、周囲に護衛と思しき十人ほどの騎士がいる。装備は槍などの長物とクロスボウなどの飛び道具を両方持っている。ずいぶん古びた装備だが、よく磨かれている。

それを見て、サクヤが決断する。

「よし。では私が彼らに接触して…」
「ちよっと待って」

いきなりアケミが横槍を挟む。

「やっぱりこういときは王道を行かなくちゃ」

手には手のひらサイズのきれいな水晶のようなもの。
嫌な予感がするサクヤ。

「それは……？」

「エターナル・コフィン
永久封印の練習で作った物よ。 ついでに中身は三頭犬ケルベロスよ」

ついでに、三頭犬は皇国軍の評価では乙種の下位に属する魔物である。普通科の歩兵で相手をするのは犠牲を覚悟しなければならず、魔導師でも、下位の者では単独戦闘は困難というレベルである。もともと、彼女達にとってはただの雑魚ネコである。
まひきいひげき
定期討伐ではよく出現する魔物である。

「それをどうするつもり？」

「もちろん。彼らにけしかける！」

「なっ！」

つまりアケミは、ケルベロスを商隊に襲いかからせると言っているのだ。

「そんな暴挙、認められるわけ……！」

「まあ待って、大事なのはここから……」

そこで声をひそめて続ける。

「ケルベロスに襲われてピンチの商隊。そこに私達が颯爽と登場！あっという間にこれを倒して謝礼をがっばり。 ついでに最寄りの都

市まで送ってもらえば万事問題無し！」

どう？と、どや顔で言ってくるアケミ。

「どうもこうもあるか！そんなこと認められるわけ……」

「あつと手が滑った」

駄目というサクヤ。それを棒読み口調のアケミが遮る。手から落ちる結晶。

次の瞬間、地面にある結晶をアケミが杖の尻で叩き壊す！

ガラスが割れるような音が、あたりに響き渡る。

現れたのは、体長二メートルを超える頭の三つある黒い犬だった。グルルル……。と唸るケルベロス。

それを即座に始末しようとするサクヤ。

だが、アケミの方が一手早かった。

「『エア・ハンマー
空槌』！」

アケミの放った空気の手で一撃されたケルベロスは、放物線を描いて商隊の方へ飛んで行った。

「アケミ！？」

「まー大変、ケルベロスが商隊の方にとんでしまったわー」

もはや完全に確信犯のアケミ。

「このままじゃ、隊商の人たちが食べられちゃう」

「この……！全員、あのケルベロスを始末するぞ！」

「……了解！」「……」

今回の商売はずいぶん上手だった。

隊商の主であるフロスト・ランスはほくほく顔だった。

運よく、訪れた都市で、運んでいた工芸品の櫛が大流行していたのだ。

即座に仕入れ値の三倍以上の価格で売り払い、その夜は、隊の者と一緒に普段は飲まない高級なワインを飲んで楽しんだものだ。

今積んでいる荷は武具の作成に使用される魔物の鱗だ。こういった物は魔物を呼び寄せるためあまり運び手がないのだが、今回の商売でずいぶん懐に余裕のあるフロストは、傭兵ギルドから腕の立つ部隊を紹介してもらい、その護衛で乗り切ろうとしていた。

今回通るルートがそれほど危険の大きい場所ではないのも理由の一つだ。

（今回の商売も上手くいくといいが…）

とりあえず、あまり信じてもない神に祈ってみる。

不信心への制裁は、空からやってきた。

「んっ？」

突然、右手の森から黒い何かが飛び出してきた。

「グルルル…！」

「馬鹿な！ケルベロスだと！」

傭兵隊の長が焦ったように叫ぶ。

現れたのは魔物の中でもかなり上位に位置づけられる大物、ケルベロス。小さな森では支配者として君臨している事もある怪物だ。時に森を抜けたケルベロスが、小さな町一つを全滅させたという話も聞いた事があった。

そんな怪物が、今目の前に！

フロストの足は、まるで石になったかのように動かない。乗っていた馬車の馬も、動揺して暴れて足を折ってしまう。

「前衛は槍を並べろ！後衛はクロスボウで狙え！矢は魔^ま矢^やを使え、出し惜しみするな！」

護衛の傭兵は、最初こそ動揺を見せたが後の動きは迅速だった。即座に陣形を整えて、後方の馬車を守る態勢と整える。だが、やはり怯えは隠せない。

その怯えを見透かしたかのように、ケルベロスがゆっくりと一步を踏み出す。

震える槍の穂先。

そして、今にもケルベロスが襲いかかる。その時。

「『^{リヒング・バインド}捕縛^{リヒング・バインド}』！」

可愛らしい女性の声が森の中から響いた。

次の瞬間、今にも飛びかかろうとしていたケルベロスの足を、地中から突如として生えた蔓が拘束する。

突然足が動かなくなったケルベロスは、即座にそれを振り払おうとする。

そこに二つ目の声が響く。

「『^{アロー}神矢^{アロー}』！」

そこに、森の中から飛び出した銀色の矢が、ケルベロスの頭めがけて突っ込んでいく。

しかし、危険を感じたケルベロスは、動かない足をあきらめて、伏せる事でその攻撃をかわす。

それた矢は反対側の森に突き進み、大きな岩を轟音と共に一撃で粉碎した。

森の中からは「畜生、外した〜！」という叫びが聞こえる。

その威力に、ケルベロスも傭兵隊もどちらも啞然とした表情を浮かべる。あんな威力『神矢』これまで見た事も聞いた事もない。

命の危機を感じたケルベロスは、必死になって足の蔓を引きちぎると、一目散に逃げようとする。

だが、その逃避行は僅か数歩で終わりを告げる。

目の前に、うつすらと水色の光を放つ透明な壁が現れたのだ。

一気に突き破ろうとするケルベロスだが「ギャンツ！」という悲鳴とともにあっさり弾き返される。

その後は、態勢を立て直す余裕も与えられなかった。

「うおおおおっ！」

奇妙な片刃の湾曲した剣を持った女性剣士が森から飛び出し、一気に距離を詰める。

「てやあああつ！」

振り下ろされた刃は、一撃で首の一つを切り飛ばす！

「ギャーーーーー！！」

絶叫をあげる、残された二つの頭。
そこにさらなる追撃が加えられる。

「『重力異常』！」
グラビティン

突如自重を増大させられたケルベロスは、一瞬で足をへし折られ、そのまま地面に半ばめり込む。

「……………」

もはや悲鳴を上げる事も出来ない。
最後のとどめは、炎の渦だった。

「『インフェルノ 火焰地獄』！」

真っ赤な何かがケルベロスに突き刺さったかと思うと、目も眩むような閃光が放たれた。

次の瞬間、周囲は赤も青も通り越した真っ白な炎に包まれ、ケルベロスを一瞬で焼き尽くす！

こっちも焼き尽くされるかと、一瞬死を覚悟する傭兵隊とフロストだったが、炎は途中でさっきのうっすらと光る結界に遮られ、彼らまで被害をもたらすことはなかった。

もはや言葉もない彼らの前で、炎は徐々に小さくなり、その後は焼けるどころか半分溶けてガラス質になった大地が残されるだけだった。

「みなさん大丈夫です!？」

呆然とする彼らに駆け寄るのは、長い美しい黒髪の少女と、それに率いられる四人の美少女達だった。

見た事のない杖と剣を持った彼らが、フロストにはまるで伝説の戦女神のように見えた。

もちろん、彼は後ほど嫌と言うほどの思いを後悔する羽目になる。

やってきたのは女神ではなく、厄病神と破壊神、その両方を併せ持つ悪魔よりも性質の悪い存在だった。

あれ、なんか弱くない？

「フンフンフフン」

サクヤは馬車の荷台に座ってご機嫌だった。商隊の主のフロストさんにお礼としてきれいな櫛をもらったからだ。いままでこんな贈り物をされた事のなかったサクヤは大変これを気に入っていた。

「…あの、アキラさん。サクヤ隊長ってそんなにモテなかったんですか？」

荷台の隅でサツキが小声でアキラに問いかける。

士官学校で同期だったアキラは、同じく小声で答える。

「いや、最初はそんなことはなかったんだ。あいつは見た目もいいし頭も悪くない。入学式前に営倉入りしたってのも堅さを感じさせなくてむしろいいくらいだったんだ」

「ならなんで？」

不思議そうなサツキ。それなら、櫛の一つや二つもらってそうなの。

「実は入学直後にあいつのところに、恋人志望の奴らが大笑して押し寄せたんだがな。そこを航空隊の練習生が誤爆したんだ」

雷撃魔法で死屍累々だったというアキラの言葉にうわっという反応をするサツキ。

「それから悲劇が続いてな。告白しようと校舎裏に呼び出された

らワームの巣を掘りあてるし、屋上で告白しようとした奴はロック鳥に連れ去られて危うく食われそうになった。こんな感じで、告白しようとした奴らに宝くじで二連続五億当てるよりあり得ない頻度でトラブルを起こしまくってな」

最悪だったのは遊園地の…というアキラの答えを聞いて、今回の転移ミスって隊長のせいなんじゃ…、と思うサツキだった。

「それって、私達も危険って事じゃ…」

「あいつの率いた部隊の三か月離職率は九割を超えている」

貧乏くじ引いたー、と頭を抱えるサツキに、お前も問題抱えてここに飛ばされただろうと呆れた目を向けるアキラ。

「あれ？そういえばアケミさんはどうしたんですか？」

サツキがふと周りを見ると、横で昼寝をしていたアケミがいない。壁際では、サキがまた結界を張って引きこもっているし、アキラは拡張鞆から道具を出して刀を手入れしている。サクヤは相変わらず下手くそな鼻歌を歌ってお花畑だ。

「ああ。あいつの事だから、さっきのおっさんとなんか交渉でもしてるんだろ」

刀に息を吹きかけながらアキラが答える。

「情報収集とかはあいつの十八番おはじだからな」

「いや、危ないところを助けていただき本当に助かりました」

フロストは御者台の隣に座る美少女に心から感謝をささげていた。見たところ、少女の年齢は十代の後半だろうか。きれいな茶髪を腰まで伸ばしている。表情は見るからに活発そうに見える。

見た目から考えて、奥の荷台にいる短髪の女性剣士（もちろんこれは誤解。実際は男）が彼女がこの集団のリーダーだろう。

すぐ後ろで鼻歌を歌っている少女が隊長なのだが、そんなことは露とも知らないフロスト。

「いいえ。ただ通りかかったから助けただけよ」

少女の話す帝国語は若干古風ななまりがあつたが、特に聞き取りづら事はなかった。

「そういえばお名前をうかがっておりませんでした。よろしければお教え願えませんか？」

「私？私の名前はアケミよ。ファミリー・ネーム名字は秘密で」

「私は行商しております、フロスト・ランスといいます。フロストとお呼び下さい」

「わかったわ。フロストさん、街までよろしくね」

「お任せ下さい。それより、先ほどの謝礼は…」

「ああ、構わないわ。あのくらいどうってことないから」

その言葉に、驚愕するフロスト。

「なんと！あれほどの魔物を退治して大した事ないとは。さぞかし名の通った傭兵でしょうに、不勉強で申し訳ありません」

「えっ…、い、いえ。そんな事ないわ。私達、辺境の村から出て来たばかりなの。だからその傭兵の仕組みって教えてくれない？」
「ほほう、そうでしたか。では私から簡単に説明しましょう」

傭兵とは、そのままフリーの武装集団の事です。

盗賊と違うのは、国際的なギルドに所属しており、その犯罪行為等はギルド直轄の制裁部隊が取り締まっております。

戦争などが起きれば、それぞれ国に雇われて戦うのですが、最近は大きな争いも減りましたし基本的に商隊の護衛や町の周囲に出没する魔物の討伐。他には大規模な遺跡の調査や探検でしょうか。傭兵と言っても何でも屋的な仕事が最近はメインの様ですな。

「詳しい事はそこにいる傭兵の方にうかがってみましょう。ガルシア殿！こちらのお嬢様に傭兵について教えていただけませんか？」
「構いませんが？」

フロストの呼び声に応えたのは、馬車の周囲に展開している騎馬の一騎だ。器用に手綱を操り馬車に馬を寄せる。

「こちらが傭兵団『フツの神剣』団長を務められておりますガルシア・カミシロ殿です。このあたりでは珍しく、東方の剣神を崇める部隊です」

「始めまして。紹介されましたガルシアと言います」

「私はアケミ。理由^{わけ}あって名字は秘密よ」

握手するアケミとガルシア。

紹介されたガルシアは、傭兵団の長というにはいささか若くやわらかい空気を纏っている。だが、その手の剣ダコは彼がどれだけ長く剣を握ってきたかを物語っている。

「ガルシア殿、すみませんがこのお嬢様に傭兵ギルドの事を教えてくださいませぬか？」

「構いませんよ」

そう言つて微笑むと、ガルシアは懷から一枚の灰色の金属製カードを取り出した。

「これがギルドの所属者全員に配られる証です。ここには本人の名前とギルドでのランク、それに数人の集団を作っている場合はその集団名が刻まれます」

ガルシアの指が、カードの上を滑る。

「ギルドでのランクは、こなせる仕事のレベルに関わってきます。他にも、ランクが上がるとギルド直轄の宿や料亭の利用が安くなったりタダになったりします」

まあ、そこまで高位の集団や個人はそう多くはありませんが、と笑う。ついでに『フツの神剣』のレベルはA+。かなり上位の部隊だ。これなら宿屋はタダ。料亭も半額で利用できる。

「そういえば、あなたは魔導師がいるんですよね？」

「ええ、そうね」

「でしたら、魔導師ギルドも訪れると良いでしょう」

「魔導師ギルド？」

「ええ、魔導師の方だと、傭兵ギルドと魔導師ギルドの両方に所属する場合がありますね」

魔導師ギルドは支部の数が傭兵ギルドに比べて少なくて利用できる設備も少ないのですが、代わりに国が所蔵している貴重な魔導書

や魔道具を見せてもらえるようになります。

「他にも、魔法学園の研究室へも立ち入ることが出来るはずです」

とりあえず色々便利だという事はアケミにも分かった。適当な情報収集である。

「いやはや、私としてもあれほど凄まじい攻撃魔法や治癒魔法は見た事ありませんぞ！」

フロストが興奮した様子で話す。

「サツキ殿やアケミ殿ほどの腕の魔導師であれば、ギルドの審査など一発で通ってBランク以上がもらえるでしょう」

「へ」

実は戦いの後、サツキが治癒魔法で足を折った馬を治療していたのだ。

見る見るうちに傷がふさがって、折れていた骨も固定した上で回復魔法をかけて数分で元通りだった。あまりの効果に傭兵団の間は息を吞んでいた。

ついでにサクヤはただの従者みたいに見られている。最初に声をかけたはいいが、緊張して声が出なくなっただけのまま交渉をアケミとアキラが代わったからだ。頼りない隊長である。サキは明らかに変な人オーラを放っていたのでなんとなく距離を置かれている。正解の反応だ。

その時、隊列の少し先を進んでいた斥候役の傭兵が、大声で警告を発した。

「モンスターが出たぞ！」

いままでのダレた空気が一瞬で引き締まり、鼻歌を歌っていたサクヤも真剣な表情で四人に指示を出している。

「サツキは馬車で待機。必要だと思ったらここにいる全員に防御上昇と攻撃上昇の補助魔法をお願い。サキも同じ。守りは任せたわよ。アキラ、アケミは前衛で傭兵の人たちと一緒に突っ込んで。私は中衛でサポートするわ」

テキパキと指示を出すサクヤを、ボケつとした表情で見つめる傭兵達。この娘は飾りの杖をもった、ただの従者ではなかったのか？

「ボサボサするな！俺達の仕事なんだ、お嬢さんたちの手をわずらわすんじゃないぞ！」

「「「応！」「」」」

ガルシアの掛け声に、一斉に応える傭兵達。そして、彼らが向かった先にいたのは…

「スライム！？」

アケミの素っ頓狂な声が響いた。

「こいつ位なら俺達で余裕ですから、お嬢さんは下がって下さい」

そのまま傭兵団の者達は剣を抜いてゆっくりと近づいていく。アケミは驚きのあまり声も出ない。

皇国では、スライムは絶滅種だったのだ！あまりの弱さからその繁殖力でも補い切れず、皇国領内ではまったく姿を見かけなくなり絶滅認定され、いまでは図書館の生き物である。

まさかそんなのが生きてるとは…

隣にいるアキラも、表情には出していないが驚いている。

ついでにサクヤは…

「キヤーーーー！」

踏みつけた地面に食人植物のトラップがあり、その触手に森に引きずり込まれようとしていた。めくれるスカートを必死に抑えながら引きずられる姿はとても隊長には見えない。

「あはははは！」

「ちよつと、サツキ！笑ってないで助けてよ！」

馬車の上ではその姿がツボに入ったサツキが爆笑し、その隣でサキが記録魔法を起動してその光景を録画していた。

周囲の傭兵は、まずスライムを片付けるべきか、サクヤを助けるべきか、サツキ達の反応を見て悩んでいる。

結局、スライムは傭兵団が切り刻んだ後アケミが火焰魔法で焼却処分し、その後全員で食人植物に襲われているサクヤの元に向かう事になった。

「グスツ…死にたい…」

「まあまあサクヤ。たまにはこういう事もあるって」

そこには、自力で脱出して全身粘液まみれのサクヤが、精神に多大なショックを受け木に向かって座り込んでいた。泣きべそのサクヤを、アキラが慰めている。他の連中は意外と美味な食人植物の実を食べるのに夢中だった。

「これ意外といけるわね」

「おいしいですね！」

「…ムシャムシャムシャムシャ…」

ちなみに、上から順にアケミ、サツキ、サキである。

「…お前ら本当に死んでやる！」

「待て！落ちつけサクヤ！」

懐の短刀を喉につきたてようとするサクヤと、後ろかはがい締めにするアキラ。

あまりに混沌とした状況に、ガルシア達傭兵は目を丸くするばかりだった。

作戦会議と基本方針決定

「ではこれより、第4274独立魔装小隊、作戦会議を始めます…スンツ…」

時刻は真夜中、場所はフロストさんの馬車の中。周囲にはサキが隔離結界をしいて中の音が漏れないようになっている。

議事を進めるのは隊長のサクヤ。粘液まみれの汎用防御服は水魔法で体ごと洗濯機に入れるように適当に洗った後、拡張鞆にしまいこまれ、代わりになぜか入っていたクマさんの着ぐるみを着ている。まだ捕まった時の事を思い出さらしく、時折スンスン鼻をすすっている。

「まずは、情報収集を行ったアケミから」

「私が聞いた話では、このあたりが皇国領でないのは確かね。少なくとも、この防御服をみて私達が軍だって気がつかないような人間は皇国にはいないわ」

口の端に夜食のスープの残骸がこびりついたままのアケミが、ドライフルーツを食べながら報告する。

「モグモグ…。彼らが今目指しているのはこの大陸の西の果ての最大都市『リーボン』らしいわ。この辺は『イーシア』っていう国が支配してるらしくて、少なくともゴンドワナ帝国の領内ではないわね」

ゴンドワナ帝国とは、かつて皇国と交流のあった大陸の超大国である。大陸最大の国家として君臨し、皇国からも多くの技術が流れ込んだ地である。

だが、ある頃から、その行き来も徐々にすたれ、ここ三百年ほど一切の交流を皇国は大陸国家と行っていない。現状は一切不明である。

「とりあえず、ギルドってところに入れば色々情報収集に便利そうね」

「では、ギルドに入るのに賛成の者」

サクヤの問いかけに、サキ以外の全員が手を上げる。ついでにサツキがサキの表情を見て「これは賛成してる顔ですね」と言っている。他の誰も見分けはつかない。適当に言ってるだけである。

「次はこの辺の魔物について……スンツ。アキラくん、お願い」

魔物と口にする時、またあの食人植物を思い出したのか、サクヤが鼻をすする。

「魔物についてだが、この付近の魔物は皇国周辺よりも確実に弱い」
アキラが堂々とした態度で報告する。見た目は女の子でも心と体は男である、はっきり言ってこっちの方がずっと隊長らしい。

「さっきのケルベロスで、このあたりの最大魔物らしい。スライムがいる事から甲種の魔物はいないか、もしくは極めて数が少ないのだろう」

ついでに、皇国の研究で甲種の魔物が生息する地域では丁種ていしゅの魔物（スライムとかその他色々）は生息不能だと言われている。

皇国においては、魔物は基本的に甲種から丁種までの四段階に分類されている。先日ここまで飛ばされる原因を作った炎龍は甲種に

属する。スライムは丁種だ。

ちなみに『炎王』はこれらの分類には含まれず、魔王級魔物に与えられる『特種』の分類に含まれる。もはや災害クラスの化け物であり、皇室の人間による『盟約』が不可欠な存在である。

「また、先ほどの傭兵団の装備とケルベロスへの対処を見るに、魔物に対抗する各種能力がこのあたりではかなり低いと予想される。少なくとも、恒常強化魔法は一切使用されていない」

恒常強化魔法とは、軍の兵士全てが身につける自立型魔道具だ。空气中の魔力を吸収する魔法石を利用して、保有者の魔力に関係なく強化魔法をかけ続ける便利なアイテムである。彼らは独立魔装小队だからさらにいくつかの追加装備を身につけている。

「私も『マジック・アイ鑑定眼』で見えましたけど、魔法が付与された武装はクロスポウの矢と隊長さんが持ってた直剣だけです。直剣の魔法はたぶん風系で、動きに合わせて武器を加速させるものだと思います」

サツキが報告を補完する。さすがは補助系魔法の天才である（ただしバーサーカー）。

「そうか…」

クマさん姿のまま首をかしげるサクヤ。なんとなく暑苦しい。しかし、いままでの情報から推測できるこの国の軍隊のレベルは、いくらなんでも低すぎた。

「たしか『フツの神剣』のギルドレベルがA+だったんだな？」

「そうよ。私が直接見たから、偽装でもない限り間違いないわ」

「彼らでA+だとすると、私達は相当強い事になるぞ？」

第4274小隊は、性格や素行こそ最悪だが、能力面では超一流がそろっている。しかも皇国基準でだ。いったいこの国の基準ではどれほどのレベルになるのだろうか？

「まあ、考えても仕方ないのかな…」

答えの出ない問いを放棄するサクヤ。

「とりあえず、当面はこのあたりのギルドに所属し、情報の収集と本国帰還の方法を探る事にします」

「了解」「」

三人が返事をする。ついでにサキは完全に寝ている。

「ではこれで会議は終了…？」

その時、サクヤはサキが寝ている事に気がついた。しかも自分の周囲にだけもう一層結界を張っている。会議開始時に張った隔離結界はそのままだ。

「ちょっと、出られないじゃないの！」「」

アケミが吠える。結界を解除できるのはサキだけだ。これでは出る事が出来ない。

「問題はそれだけじゃないな…」

結界を調べながらアキラが続ける。

「はい。この結界は周囲の空気も完全に遮断してます」

それをサツキが引き取る。

「それってつまり…？」

「このままだと、私達は窒息死と言う事だ」

恐る恐る問いかけるアケミに、アキラがあっさりと答えた。

「それなら、サキを起こせば…」

「そうするとああなる」

アキラが指さす先では、結界に触れたサクヤが結界から染み出してきた謎の粘液に絡めとられていた。

「いやだ！誰か助け…あつ！服が！」

「ああなるのはごめんよね」

「そうだな」

「賛成です！」

「この薄情者！」

「じゃあ、私達はこのままサキが起きるのを待ちましょうか？」

「そうだな」

「賛成です！」

「ひゃっ！そんなところ…アッ…」

……………

翌朝。

ドーン！

「何事ですか！？」

フロストの商隊の馬車一台が、突如として爆発した。

あわてて駆け付けたフロストと傭兵達の見たものは、ふっ飛ばされて気絶している御者と、なぜか服が半分溶けて半裸の状態でネットになっっているサクヤに、これまた服が至る所で破けて、息も絶え絶えのアケミ、アキラ、サツキの三人。そして、今日が覚めたばかりという感じの爽やかな表情を浮かべたサキだった。

「ハア…ハア…。まさかサキがこんなに長く寝るなんて…」

「あと一步で窒息死するところだったな」

「だからって、攻撃魔法はやりすぎです…」

「…もうお嫁にいけない…」

「…久しぶりによく寝た…」

あまりの混沌具合に絶句しているフロスト達に、サキが小さく言った。

「…おなかすいた。ご飯まだ？」

結局、こういうときは日常への逃避が最も近道なのだとフロスト達は痛感した。

詮索せずに食事の準備を進める彼らの背後では、キレたサクヤがアケミとアキラ相手に決闘に突入し、周囲に小規模なクレーターを量産していた。

「ちょ！サクヤ、落ち着いて！」

「戦闘以外での攻撃魔法の使用は厳禁だぞ！」

「知るか！お前らなんかまとめて始末してやる！」

この三人を見ながら、サクヤの拡張鞆から着替えの服を探すサツキ。さすがにあの半裸の格好は商隊の人間に目に毒だろう。

「三人とも仲良しですね」

「…あの三人は士官学校同期だから…」

周囲に被害が出ないように、結界を張っているサキが答える。

「へー。アキラさんとサクヤ隊長は知ってましたけど、アケミさんもなんですな」

「…私は、あなたより先に部隊に来たから…」

ドカンドカンという爆音をあっさりスルーしながら世間話に興じるサキとサツキ。

「それよりサキさん、結界張って眠るの止めて下さいよ。あと一歩で窒息死するところだったんですから」

「…努力はする…」

食事を用意している向こうでは、巻き込まれた魔物が飛ばされてきて大騒ぎになっている。

「あつ、すみません。私はあっちの魔物を始末してくるんで、結界の方よろしく願います」

「…まかせて…」

結局、長引く戦いにいら立ったサキがサクヤに精神魔法を叩きこんで昏倒させ、決闘は終わった（ついでにサクヤは猛烈にうなされていた）。

結果。

戦闘に突入した三人の内、朝食を食いそびれたアケミとアキラは一日ぐったり。サクヤは完全にダウンしてアキラがだるそうに看病している（服もアケミが拡張靴に入っていた旅装に着換えさせた）。サキとサツキはちゃっかりご飯を頂いて、一日のんびり過ごしましたとさ。

めでたしめでたし？

さらば4274小隊――脱走のサクヤ――1

乱闘騒ぎの翌日の昼、商隊はリーボンに到着した。

街は高い石壁に囲まれ、内側にはいくつかの高い建物が見える。

「うわー。あんな高い建物、皇都以外で見た事ないです!」

サクキが歓声を上げている。皇国領内では基本的に高い建物は厳禁である。飛行系の魔物に目をつけられて営巢されたりするからだ。例外は皇都やその他防備の整った大都市だけだ。

門のところでは当然のように荷物が改められる。

「ほう、この荷物は魔物の鱗か」

「はい。腕の良い護衛を雇えまして、ここまで無事にたどり着けました」

門番の兵士に、フロストが低姿勢で対応している。

「ふむ、いいだろう。この紙を奥の奴に見せて税を払え」

そのままあっさりと門番は通した。

「私達の身元を聞いたりしないんですね？」

サクヤが小声でフロストに問いかける。

「は、はい。基本的にギルドの人間と一緒にいる場合は審査はありませんね。私もダルクの商人ギルドに所属しておりますし、『フツの神剣』はこの辺では名の知れた傭兵ですから」

「へー、そうなんですか」

なぜかどもったフロストを怪訝そうに見るサクヤ。長引く乱闘騒ぎにいら立ったサキが、サクヤに精神系魔法を食らわせて一晩昏倒させたせいか、サクヤは先日の中裸ヌメヌメ乱闘事件を完全に忘却していた。

しかし、傭兵団やフロストは別である。話しかけられるたびにその姿を思い出してしまい、顔をまともに見れなくなっていた。

「それよりも、ここまで送っていただきありがとうございました」
「いえいえ、こちらこそケルベロスの襲撃から助けていただき本当にありがとうございます」

またの再会を、と言ってフロストと傭兵団はサクヤ達と分かれて行った。この後報酬の支払いが行われてフロストと傭兵団も別々に分かれるのだろう。

ついでに、先だってサクヤ達が破壊した馬車の修繕（作り直しとも言う）費用は、これからサクヤ達が何でも一つフロストやガルシア達の依頼を受けるといふ誓約をする事で負けてもらった。本当はもっと搾り取りたかったフロストだが、アケミが「いっそ全員始末してごまかす？」などと言っているのを聞いて断念した。龍のしっぽを踏んでまで賠償させようとはフロストも思わなかった。

（それに、これからが期待できそうな者達でしたからの）

これならきつと元は取れると踏んだフロスト。先行投資で馬車一台は痛い、後にきつと何倍にもなって帰ってくるはずだ。そうだ。そう信じるんだ！

自分に言い聞かせながら、壊れた馬車を見て涙目のフロストを、傭兵団が気の毒そうに見守っていた。

「よし。では、私達はまずギルドに登録してもらおう」

フロストと傭兵団の反応に釈然としないものを感じながらも、サクヤは四人に今後の方針を示す。

ギルドの事務所は街の東側、役所の支所の真正面に位置していることから、傭兵ギルドという組織がかなりの力を持っている事がうかがえた。

カバリと扉を開けるサクヤ。

そこには丸テーブルが並んだ広い広間があり、食事をしている見るからに荒くれ者という大男たちやローブをまとい難しげな表情でなにか議論している男達、それぞれの種族特有の鎧を見せあっている獣人など、混沌とした状況が広がっていた。

「あわー、凄いです〜！」

サツキがまた感嘆の叫びをあげている。サクヤやアケミ、アキラは平然としたものだ。このくらい、大遠征時の方面軍集会ではざらにある光景だからだ。サキは目をしょぼつかせ眠そうにしている。不眠症は治っていない。

「サツキ！あんまり離れるな。厄介事に巻き込まれるぞ」

「えっ、でも…」

サクヤがサツキに離れないように言うと、なぜかサツキが躊躇する様子を見せる。

いつの間にか他の三人もサクヤから距離を取り始めている。

「な、なんだ！？私に何か虫でもついてるのか！？」

動揺するサクヤ。

「いや、そういうわけじゃないんだが…」

「ただ、いつものパターンから考えるとね？」

「…特に意味はありませんよ！？」

「…危険…」

「「「ちよっ！サキ、ダイレクト過ぎ（です）！」「」」

上から順にアキラ、アケミ、サツキ、サキ、そしてサキ以外三人である。

四人の言葉を聞いてムカツとくるサクヤ。

「…なんだ、私が何か悪い物でも呼び寄せると言うのか？」

それに、小さくうなづく四人。

「だったら私一人でギルド登録してくる！お前達はここで待ってる！」

そのまま踵を返して広間の奥にあるギルドの受付に向かうサクヤ。
ヒョイツ。

その足元に一枚のバナナの皮が投げ込まれた。
怒って視野狭窄のサクヤ、これに気がつかない。
踏んだ。

「キャッ！」

転んだ。

ドンガラガッシャーン！

そして料理の並んでいる、近くのテーブルに突っ込んだ。

「……………」

「……………」

料理の残骸でぐちゃぐちゃになって倒れたサクヤと、料理を台無しにされた男達三人の間で一瞬の沈黙が降りる。

そして、

「ざけんじゃねーぞこのクソアマ！」

「なにしくさつてんだ！」

「なめてんのかゴラァ！」

「ご、御免なさい！」

激怒する男達と平謝りするサクヤ。

「今すぐ弁償しろや！」

「わ、私お金持ってないんです…」

「ああ？今何て言った？」

「だから、お金…」

「だったら体で払え」

「そんな！？」

慌てて仲間の姿を探すサクヤ。だが、四人はすでにサキの姿隠しの結果で逃げ去っていた。あ、今一瞬だけアケミが顔を出して「がんばれ」のジェスチャーをした。

「は、薄情者〜！」

「何叫んでやがる。おい、さっさと部屋に運ぶぞ」

「オッス」

「そんな、やだ！あ、待って！他の事でお金は払うから…！」

そのまま男達に抱えられ、部屋に連れ去られようとするサクヤ。それを見て、結界の中で涙をぬぐっている（ふり）をするアケミ。

「サクヤは私達のための尊い犠牲になったのよ…」
「待て！」

その時、凜々しい声が男達を呼びとめた。

「ああ？何だつてんだ？」

「女性に乱暴するのはよさないか。金なら私が肩代わりするから、その少女を放しなさい」

現れたのは、引き締まった体をしたカッコいい剣士。腰には大きな両刃の大剣を吊るし、要所要所に金属板が使われた軽装の鎧をまとっている。

「俺達はちょうどいいところをこの女に邪魔されたんだ。金払うだけじゃおさまらねーな」

サクヤを抱えた男達が下卑た声で笑う。

もうサクヤは涙目で、剣士に期待のまなざしを向けている。自分で何とかしろ隊長。

「そうか、これを見ても駄目かね？」

そう言つて、剣士は懐のギルドカードを取り出す。
それを見た男達は、

「ゲッ！お前はあの…！」

そう言つて絶句する。

「できれば彼女を置いていつてほしいのだが」

剣士は笑顔で圧力を加える。手は剣の柄にかかっている。

「わ、分かった。金もいらねー」

そのまま男達は逃げるように去つて行つた。

「あ、あの。助けてくれてありがとうございます！」

「いえ、大した事ありません。それより、体が汚れてしまつていま
すからギルドの宿で洗つてしまひましょう」

「は、はい」

ほんのり頬を桜色に染めるサクヤ。

そのままサクヤは剣士に連れられてギルドの宿に向かって行つた。

「あらゝ。これは予想外の展開ね。とうとうサクヤにも春が訪れた
のかしら？」

「すごいかつこいい人でしたね！」

アケミとサツキが気配隠しの結界の中で口々に話す。周囲の人間はなんとなく不思議そうにきよるきよるしているが、強力な結界のせいではつきりとは感じ取れない。

女が三人寄れば姦^{かしま}しいと言うが、二人でも十分うるさい。

しかし、アキラだけがなんとなく変な表情をしている。

「どうしたのアキラ？」

「いや、なんとなくあの剣士に妙な感じを受けてな…」

「妙な？」

「ああ。自分でもよくわからないんだが…」

「まあ、そんなのは後回しにして、私達はまずこいつをどうにかしましょう」

「ンーーー！」

四人の足元には、一人の男がバインドに縛られ猿轡を嚙まされて転がされている。さっきサクヤの足元にバナナの皮を投げ込んだ男だ。

「仲間が結構な目にあつたんだし、たつぷり絞ってあげましょうか」

「そうだな」

「やつちやいましょうー！」

「…ちよつと激怒…」

それぞれの心境を語る四人。

アケミが男の目を覗き込むように見て、邪悪な笑みを浮かべる。

「これから生まれた事を後悔するような目にあわせてあげるから、覚悟しなさい」

「ッーーー！」

声にならない悲鳴を上げながら、男はアケミ達に連れられて、誰にも気づかれる事なくギルドの建物から姿を消した。

「あ、あの。さっきは助けていただいてありがとうございました！」

サクヤは剣士に連れてこられたギルドの宿で汚れた体をきれいに洗った。

「いや、ここまで来る途中に食人植物に襲われてから、満足に体を洗えていなかったからものすごく気持ちよかった。

服は洗いに出していて、今は剣士に貸してもらった男物の大きめのシャツ一枚の、なんともそそる姿だった。

「気にする事はない。困っている時はお互い様だからね」

剣士はそう言って爽やかに笑った。その顔に、ちょっとときめくサクヤ。乙女な奴である。

「それより、私の方からも君に頼みがあるんだ」

剣士が少し真剣な表情になった言った。

「私はこれからイーシアの首都『イス』に向かうのだが、そのに魔導師の同行者が欲しいんだ。途中の森は魔物が多く出没するエリアで、迂回路もあるが時間がかかる。私としては出来るだけ急ぎたいから、念を入れて支援魔法を使える魔導師が欲しいんだ」

君のそれは変わった形をしているが杖だろう？と確認する剣士。

「は、はい。支援魔法も一通り使えますけど」

「では、私と一緒に来てくれないか？もちろん、無理にとは言わないが……」

「それは……」

サクヤの脳裏に仲間達四人の姿が一瞬浮かんだが、即座に消去する。あんな薄情者達、知ったもんか！

怒りのまま、胸元の識別票（自分の位置を仲間知らせたり、死んだときに識別するための装備）の位置発信機能を切る。これでサクヤの位置は仲間の誰も分からない。

「行きます！むしろ一緒に行かせて下さい！」

「そ、そうか」

急に積極的になったサクヤに驚く剣士だったが、来てくれるのはありがたいのでそのまま受け入れる。

「それより、名前を言ってなかったね。私の名前はレックス。そのまま呼んでくれると嬉しい」

「私はサクヤです。レックスさん、よろしくお願いします」

サクヤの脳裏から、祖国への帰還と言う目的は、きれいさっぱり消え去っていた。

さらば4274小隊――脱走のサクヤ――2

「じゃ、これから第4274独立魔装小隊緊急会議をはじめます」
「はい！」

場所はギルドの宿。集まったのはサクヤを除いた四人と、

「ほら奴隷、さつさと飲み物準備しなさい」
「は、はい！ただいま！」

先ほどギルドでサクヤの足元にバナナの皮を投げた気の弱そうな青年である。名前はロイド。名字はない。ついでにサツキからは『ゴミ虫』アケミからは『奴隷』アキラからは『召使い』と呼ばれている。サキは侮蔑の瞳で一瞥するだけだ。一番ひどい。

サクヤが剣士と一緒に行った後、アケミは四人でギルドにチーム登録をして、サクヤの分は仮証という形でギルドカードをもらっていた。

ギルドランクは最低のF。基本的に全ての傭兵がこのランクから出発して上を目指して行くのだ。

それとは別にチームの規模を示すランクもあり、こちらはEランク。下から三番目のランクで、これは単純に人数に比例しているらしい。

「まずはサクヤをどうするかよね」

どうやらサクヤは本気で怒ったらしく、助けてくれた剣士とともに臨時のパーティーを組んでどこかに行くつもりらしい。

「サキ、サクヤの位置やっぱり掴めない？」

「…識別票を切っている。無理…」
「やっぱりね」

サクヤ達はギルドの宿で体を洗った後、サクヤの隠蔽魔法で完全に姿を隠した上で、街の中の別の宿に移動してしまった。完全にこちらを撒く気である。

それからすでに丸一日が過ぎ、今は昼である。いい加減見つけておかないと追いかけるのがめんどくさくなる。

その時アキラが、あつ、という顔をした。

「どうしたのアキラ？」

「そついえば、以前の遊園地の騒動の時、あいつの杖に例の部品を組み込んだはずだ」

「あつ！確かにあの後オーバーホールしたっていう話も聞いてないし。大体、並みの技師じゃおかしいと思わないわよ」

よし、という表情でうなずいたアキラが、サキに問いかける。

「サキ、悪いが今から言う方法で魔力探知を行ってくれないか？」

「…構わない。けど、一体どういう方法…」

「それはな…」

同じ頃。リーボン・イース街道。

サクヤは上機嫌だった。

その姿は、リーボンでレックスに買ってもらった新品の魔法防御服上下に、今までどおりの杖、そして上等な帽子だった。懐には、

フロストからもらった櫛も入っている。
もちろん、買ったのはレックスだ。

「レックスさん、本当にこんなのもらっていいんですか？」

「構わないよ。これでも僕はそこそこ強くてね。ギルドの依頼で報酬はかなりたまってるんだ」

「へへ。レックスさんて強いんですね」

素直に尊敬のまなざしを向けるサクヤ。

それを見て、レックスは君もだろ、と言いつうになった。

宿から抜け出す時の隠蔽魔法。それはこれまで見た事もないような複雑な光学魔法を幾重にも同時展開し、さらに音、空気の流れ、魔力探知の妨害まで掛けた、宮廷魔術師すら不可能だろうという素晴らしいものだった。

実際、目の前を人が通ったりしても気がつかれる気配はなかった。

（これほどの魔導師がいたとは…）

レックスがサクヤに声をかけた目的はイースに行く事だけではなかったが、まさかの逸材と出会えて、レックスも上機嫌だった。服や装飾品など安いものである。

「それより、そろそろ魔物の頻出地帯に入るから、支援魔法の準備をよろしく頼むよ」

「はい！」

杖を胸元で抱きしめて、サクヤが明るく返事をする。

（私、ここで脱走してレックスさんと一緒に幸せになろうかな？）

本気で仲間の元に戻る気がなくなってきたサクヤだった。
その時、杖の中の部品の一つが小さく光ったのに、サクヤは気が
つかなかった。

「…見つけた…」

サキの魔法がサクヤの方向を指し示す。

「方位は？」

「…北東の方…」

「よし！奴隷、そつちには何があるの？」

「い、イスへの街道があります。はい」

「よし！全員、先回りして待ち構えるわよ！」

「…了解！」「…」

サクヤの杖に仕込まれた魔道具の名前は『幸せカウンター（土官
学校魔法技術研究会命名）』持ち主が幸せを感じたら周囲に微弱な
魔力を出してそれを知らせるアイテムだ。

士官学校時代、サクヤが遊園地にデートに誘われたと聞いたアケ
ミ達が、研究会に押し掛けて、常時保持が義務付けられるサクヤの
杖を勝手に改造。そのままデートの後をつけて、どれだけ幸せ反応
が出るかで賭けをしていたのだ。

しかし、結局デートは大惨事に終わり、アケミ達もそんなものを
取り付けた事をすっかり忘れていたのだ。
それが今回生きた。

「サツキ、サキ。サクヤに気がつかないように、『電電』を感知されたあたりに打ちあげといて。街道沿いにもね。私達はこのままイースに先回りして、サクヤが来るのを待ち構えるわよ！」

指示を受けて、サツキとサキが宿の窓から長距離高高度偵察用術式『電電^{でんでん}』を数発打ち上げる。大規模戦闘では必須の魔法で、大会戦時には千を超えるこれが後方支援魔導師の手によって打ち上げられ、司令部への情報伝達や前線でのデータリンクに利用される。

このような小隊規模でも哨戒用の偵察魔法としてよく利用されている。今回は追加で隠蔽術式を重ね掛けしてある。支援魔法の専門家ならではの技術である。

レックスに合わせて地上を歩いているサクヤがイースに到着するのは、おそらく三日後。それに対し、アケミ達は飛行魔法もガンガン使って、半日での到着を予定していた。

「出発は今夜。闇にまぎれて突っ込むわよ！」

「『『『応！』『』『』』」

暗い笑みを浮かべたアケミが呟く。

「サクヤだけに、おいしい思いはさせないんだから」

「……っ！」

街道を歩いていたサクヤの背筋に、急に悪寒が走った。

「どうした？急に震えて？」

「い、いえ。ちょっと寒気が…」

嫌な予感がサクヤの脳裏をよぎる。こういうとき、ろくな事が起こったためしがない。

「もしかして、見つかった？」

まさか、アケミ達がもう私の事を見つけた？そんなの嫌だ！私はレックスさんと幸せになるんだ！

一応、魔力探知を上方に指向して、偵察術式が無いか確かめる。

「ないわね…」

しかし、支援魔法を専門とする二人が作った偵察術式はサクヤでは見破れなかった。器用貧乏の弊害である。

それでも、一応警戒しておくかと思うサクヤ。

その時、レックスが真剣な叫びを上げた。

「魔物が出た！サクヤ、支援魔法を！」

「は、はい！」

森の中から現れた四本腕のあるクマのような魔物に、サクヤを背中に守る形で一気に突っ込んでいくレックス。守られてる実感に顔が崩壊していくサクヤ。

サクヤは学習すべきであった。サクヤの悲劇は、いつも足元から始まる事に。

「っあ！キヤアアアーーー！」

「ッ！サクヤ！？」

レックスが守ってくれると油断したサクヤ。そこに突然地中から巨大なワームが飛び出した。全長十メートルを超える巨大なミミズのような怪物である。

ワームはそのまま口から出した粘液だらけの触手でサクヤを絡め取るうとする。

「もうこんなの嫌！」

嫌悪感に任せて、サクヤは杖に刻まれた定型呪と自らの織りなした魔法式を織り、自身の最大攻撃魔法を起動する。

「出でよ天上の剣『ダモクレス』！」

次の瞬間、天から降り注いだ巨大な光の剣がワームを直撃。そのまま二枚におろしてサクヤの至近距離で爆発した。

「サクヤ！？」

凄まじい土煙で、視界が全く効かない。

それが晴れた先には…

「サクヤ…！」

直径十メートルを超える巨大なクレーターのそばで、多少の傷はついているが、ほぼ無傷の魔法防御服をまとったサクヤが、余波で生じた火災を背景に平然と立っていた。

クレーターの底には何か生き物の残骸がこびりつき、もはや素材回収など望むべくもない状況になっている。

その魔法の威力に絶句するレックス。同時に、自らの欲望が掻き

立てられるのも感じた。

本気でサクヤが欲しい…。その容姿も、その魔法の腕も。全て私
のものにしたい。

（やはり彼女とは、一時の関係ではすませたくないな…）

「レックスさん、後ろ！」

その時、サクヤがレックスの背後から迫るクマもどきに悲鳴を上
げる。だが、

…斬！

振り向きざまの一閃で胴を切り裂き、さらに振り切った剣を返し
て反撃する間も与えず首を落とした。

「このくらいの魔物なら、私の敵ではないよ」

「うわゝ。レックスさんかっこいいです！」

サクヤが嬉しそうに言う。

「じゃあ、適当な素材を剥いたら、この死体を焼却してくれ」

「はい！」

その後、牙や爪といった素材を回収してサクヤの拡張鞆（マジック・バック）
スはこの魔道具に大変驚いた）に格納した後、サクヤが火焰魔法で
死体を骨まで焼いて二人はイスに向かって再び歩き出した。

その全てをサキの『電電』が見ている事に、サクヤはとうとう気
がつかなかった。

「いやゝ、一瞬ばれたかと思って焦ったわね」

アケミ達は宿の中でサキの『電電』から送られてくる映像を見て楽しんでいた。

「見てよこの顔。いつもの堅苦しい感じはどこにいったのやら。完全に恋する乙女ね」

「しかし、あの剣士もなかなかやるな。さっきの切り返しはかなり実戦慣れしている」

「私、サクヤ隊長が大技使うの始めてみました。凄いですね！」
「ZZZ.....」

四人の前にはサキが展開する投影魔法の映像がリアルタイムで映し出されている。

「あれ？あんなちゃんな魔物の牙なんてどうやって利用するのかしら？」

「わからんが、おそらく武具や防具に加工するのではないか？」

「ウソでしょ。あんな低レベルな素材じゃ、魔力の残り香で低級魔物を呼び寄せて終わりじゃない」

「だが、ケルベロスで上級魔物の扱いだぞ。ベアでも十分な素材になるのだろう」

「...なるほど。確かにそうね」

その時、宿の部屋に買い物を命じたロイドが帰ってきた。

「買い物は終わりました！」

「あつそ。じゃあ奴隷は扉の前で待ってて」

「えっ！」

「え、じゃない。奴隷に部屋を使わせるわけないでしょ」

「そ、そんな！」

「ゴミ虫は目ざわりですから早く部屋から出て下さい」

「…（薄眼を開けて侮蔑の視線）…」

「う、うわぁぁん！」

ロイドは泣きながら部屋を出て行った。

その時、アケミがある事に気がついて扉の外のロイドに尋ねる。

「そういえば、あんた買い物金はどうしたの？」

「グスン…。えっ？みなさんのチーム名義でギルドから貸していた
だきましたけど…」

「「「なんだって！」「」」

三人（サキ以外）が一斉に叫んだ。

「私達金持っていないのよ！？それなのに私達の名義で借りるとかど
うする気なのよ！？」

「えっ？でも、みなさん凄い魔法の腕をお持ちですし、それなりの
収入があるんじゃない…」

「私達は今、立派な無職だ」

「そ、そんな！」

しかし、このままではアケミ達はいきなり借金持ちになってしま
う。

支払いをどうするか、大騒ぎになる一同。

その時、サキが小さくつぶやいた。

「…チームの借金と言う事は、最終的にリーダーの責任になるはず

「……」
「……それだ!」

血走った眼でアケミが三人に言う。

「全員、なんとしてもサクヤの奴をイースで捕えるわよ。私は借金で首が回らない生活なんてまっぴらごめんよ」

「……サクヤは、隊長としての責務を果たさないと」

「私、サクヤ隊長の事大好きです!……お金を払ってくれるなら」

その様子を見て、引いた様子でロイドが言う。

「みなさん、鬼ですね……」

「……『奴隷』『召使い』『ゴミ虫』は黙ってる!」

「ひいつ!」

アケミ達は、本格的にイースへの出発準備を急ぎ始めた。

夜。

結局、初日にサクヤとレックスが魔物と遭遇したのは、最初のクマもどきと巨大ワーム以外には小さなスライムが数匹と、竜の中でも最も弱く、ギリギリでその範囲に入るか入らないかというレベルラント・ドラゴンの小型の地竜が一匹だけだった。

「やっぱりレックスさんは強いですね」

魔物避けの香を混ぜたたき火を挟んで、サクヤはレックスを褒めた。最後の地竜こそサクヤが攻撃魔法で補助したが、それなしでも十分に勝てるだけの余裕をもった戦いぶりだった。

（でも、アキラだったら、もっと早く始末しただろうな…）

一瞬、仲間の事が頭をよぎるが慌てて振り払う。あんな奴ら、知った事か！

「ほめても何も出ないけど、ありがとう」

レックスはサクヤに向かって微笑んだ。その表情にドキドキするサクヤ。だが、なんだろう。妙な違和感を感じるのだ。

「それよりも、サクヤ…」

レックスはたき火を回り込んで、サクヤの斜め後ろに動き、そのまま肩を抱くようにする。

「な、なんですか。レックスさん…！」

「私は君の事が本当に好きになってしまった様だ。こんなところで悪いけど、私に抱かれてくれないか？」

「だ、だだ、抱くってどういう事ですか!？」

「そこまで言わなきゃダメかい？」

レックスの吐息が、サクヤの耳元を掠める。
動揺しまくりなサクヤ。

その胸に、レックスの指が伸び　　。

「す、すみません！イースについたら必ず返事をしますから！それ

まで待つて下さい！」

「…そうか。確かに私も話を急に進め過ぎたね。わかった、イースに着くまでは決して君に手を出さないよ。約束する」

そのレックスの答えに、ほっとするような、残念なような複雑な気持ちを抱くサクヤ。

「あ、ありがとうございます…」

「じゃあ、今日はもう遅いから寝ようか」

そういつて、レックスは毛布にくるまり、そのまま眠りについた。普通なら見張りを残すが、サクヤが広域探査術式で周囲に網を張っているので今回は心配なかった。レックスがそれだけサクヤの術を信頼しているとも言える。

レックスが眠るのを見て、サクヤも顔を赤くしたまま毛布にくるまる。だが、頭はさっきの言葉で冴え切ってしまい、寝ようにも寝れなかった。

（どうしよう。告白されちゃった！でも、私なんかでいいのかな…。でもレックスさんがそういうなら…）

結局サクヤは、悶々とした思いを抱え、眠れぬ夜を過ごすことになった。

ちょうどそのころ。

「全員、急ぐわよ！サクヤより先にイースに着いて、索敵魔法を街

中に掛けておくのよ！大魔法が使えない街中で捕えないと逃げられるわよ！」

「「応！」」

「うわぁぁー！空！空飛んです！」

アケミ達は飛行魔法を全力起動し、夜の空を一路イースに向かって飛行していた。

目的地はイース。そこで事前に準備を整え、必殺の布陣を敷くつもりだった。

借金総額は、共通貨幣換算で金貨十八枚。皇国円で百八十万円相当。五人で割れば三十六万。でもサクヤ一人に押し付ければ、アケミ達はゼロ円！

「行くわよ！私達の幸せな未来のために！」

到着は、翌朝を予定していた。

さらば4274小隊！脱走のサクヤ！完結！（前書き）

完結とは言っても、物語は続くのです！

さらば4274小隊――脱走のサクヤ――完結！

サクヤとレックスがイースにたどり着いたのは、予定通り三日後の夕方の事だった。

「着きましたね、イース！」

サクヤは大変嬉しそうに夕焼けに照らされる周囲の街並みを眺めている。

イースは交易都市だ。大陸西方でも屈指の規模の都市であり、同時に古代に作られた複数の街道が交差する事で膨大な量の商取引が行われる商業都市となった。

都市の構造は少し変わっている。

通常の都市は、中心の城を中心に発展していくものである。だが、この都市は王城の西側にだけ市街地が広がっているのである。

これはその地形に原因がある。

王城の東側は古代の大戦で作られた巨大な湖があるのだ。直径五十キロを超える円形の湖は、かつてこの地で戦死した数十万の兵士の死体の上に水を湛えている。

王城はこれを背にするように作られており、また、街道自体もその交差点は王城より若干西側なので王城の周りより少し西側に離れた方がにぎやかな都市になっている。

都市の発展性を重視しているため、城壁は王城とその周囲の貴族の住むエリアにしかなく、西側の商業区は無節操に拡大を続け、迷路のような複雑な街並みを有している。

「このイースは道が複雑だからね。迷わないようにしっかり着いてきてくれ」

「はい！」

サクヤを気づかうレックスの言葉に、素直にならずにサクヤ。その時、ふと思いついた言葉。

「あの、手をつないでもいいですか？」

唐突なサクヤの言葉に驚くレックス。サクヤは自分で自分のセリフを恥ずかしがっている。

「い、いえ！ やっぱりなんでも……」
「いいよ」

訂正しようとするサクヤの言葉を遮って、レックスはサクヤの手を取る。その手つきは、まるで宝石を扱うように丁寧なもの。

「あ、ありがとうございます……！」
「いいよ。気にしないで」

夕焼けの街を手をつないで歩くというシチュエーションに、ゆでダコになるサクヤ。それにやさしく微笑むレックス。

（ヤバイ…、私本気でこの人の事が好き！）

自分の気持ちに興奮しているサクヤは気がつかなかった。自らを見張る複数の視線に。

「とうとう来たわね！私の肌を犠牲にして、二日間徹夜した成果、今こそ見せつけてやるわ！」

場所は商業区の中心にあるギルド直轄の宿。

そこには、目の下にくつきりとしたクマを作ったアケミ達とロイドの合わせて五人の姿があった。

五人が泊まっている部屋は、元々寝室と水場だけのシンプルな設備だった。だが、それはもはや原型をとどめていない。

広い部屋の中には、本来あったベッドの代わりに巨大な儀式魔法用魔方陣が書き込まれ、中心ではサキが二日間休むことなく魔力を注ぎ続け魔法の組み立てを続けている。

それを囲むように、マジック・バック拡張鞆から取り出した各種観測装置がずらっと並んでいる。それらは三次元投影装置で空中に像を結び『でんでん電電』から送られる各種情報を表示し、用意しているトラップの状態やサクヤの位置、そして宿に泊まりトラップを準備する事で増え続ける借金の額を表示していた。

「西正面からサクヤさんの侵入を確認！最外殻トラップ群を睡眠スリープから待機まで引き上げます！」

「東側のトラップだが、どうやら一部が警備兵に見つかったようだ。偽装魔法を重ね掛けしておく」

「…広域結界、構築率九十八パーセント。作動レベルを戦略級から戦術級に落とせばイース全域での作動が可能。ここの偽装を解除すれば全域に戦略級が可能…」

「食料の買い出し戻りました！えっと…、全部で七シルビー（皇国円換算七万円）です！」

「…高すぎる！」「…」

「ひいひい！」

五人がサクヤを待つ間に、借金の総額は共通貨で金貨三十枚。皇

国円換算で三百万円まで上昇していた。全員が目を血走らせて、サ
クヤを捕えるべく動いていた。室内には、締め切り寸前の漫画家の
部屋のような空気が漂っている。

「いい？サクヤは間違いなく、あの連れと一緒にこの宿に来るわ！
それまではこの偽装に全力をあげなさい！もし途中で気がつかれ
たら、その時は広域結界で封鎖している間にトラップ群に追い込ん
で捕えるわよ！」

「了解！」

「…（無言で力強くうなづく）…」

「…本当に鬼畜ですね…」

「…「だつたらお前が借金払え！」…」

「ひいひい！」

包囲の輪は、着実にその口を絞りつつあった。
その時、アケミが奇妙な事を発見する。

「あれ、これってどういう事？」

事態は、予想外の方向に進もうとしていた。

ギルドの宿に入った瞬間、サクヤは背筋にピリツと来る何かを感じ
た。

（嘘！なんでアケミ達がここに…！まさか、先回りされた！？）

そのままサクヤは偽装魔法を全力展開すると同時に、各種攻撃魔法を即応状態まで稼働する。これだけで二秒以内にギルドの建物は全壊させることが出来る。もっとも、アケミ達は無傷だろうが。隣では、レックスが突然戦闘態勢に入ったサクヤに驚いている。

「サクヤ、急にどうしたんだい？何かあったのか？」

「…はい。なんだか危険な気配がするので…」

少し言い淀むサクヤ。しまった、まだ仲間達がいた事をレックスに伝えていない！

若干動揺しながらも、アケミ達が捕獲しに現れるのを警戒し続けるサクヤ。

だが、一向にアケミ達が現れる様子はない。

（どういう事？もしかして、私を捕まえに来たとかじゃなく、ただ飛行魔法で移動したから先に着いただけ？）

そういえば、特に魔力を隠している気配もない。自分を探しに来たのではないなら一安心と思うサクヤだったが、探してくれない事に若干のさみしさも感じていた。

（私って、みんなにとっていらなかったのかな…）

確かに、小うるさい指揮官だったかもしれないけど、こんな時に探してすらもらえないのは少し悲しかった。

杖を構えたまま、さみしげな表情を浮かべるサクヤに、レックスが声をかける。

「サクヤ、どうしたんだ？敵はいないのかい？」

「！すみません。私の勘違いだったみたいで…」

すぐにレックスにも気がつかれないような魔力欺瞞の魔法だけをかけて、他の魔法は全て解除する。

今の今まで隠蔽魔法で姿を隠していた二人が急にギルドの前に現れたので、周囲の人間は驚いている。

「そうかい。それじゃ、今日はギルドの宿で休もうか」
「はい」

そのまま並んでギルドの受付に向かう二人。その途中、レックスがサクヤに小さく囁く。

「この前の回答を待ってるよ」
「！」

一瞬で真っ赤になるサクヤ。

「それは……」
「続きは部屋に入ってからにしよう」

その答えを、レックスは遮ってそのまま受付で宿の部屋をとる。
サクヤは赤くなりながら、黙ってレックスについていった。

サクヤは、宿の部屋の水場で湯浴みをしていた。レックスは部屋で待っている。

二人が取った部屋は、ワンルームにシャワーだけついたシンプル

な部屋。ベッドは二つあるが、その間隔は極端に狭く、寄せればすぐにダブルベッドに早変わりする代物だ。

（でもなんだろう？ レックスさん、ここの宿使い慣れてるみたいだったけど…）

レックスがギルドの受付で宿を頼むと、受付の女性は何も言わずに迷うことなく一つのカギを取り出していた。その時サクヤに向けられた目が、何かを語っていたような気が…。

「そ、そんなことより、この後どうしよう…」

レックスは回答を聞かせてくれと言っていた。ならやっぱ、ここはナニをするのだろうか。

頭の中には、マジック・バック拡張鞆に入っている勝負下着がちらついている。アケミが勝手に入れた時は怒ったが、今は感謝である。

「私、始めてだけど、ちゃんと出来るかな…」

なんとなく湯の流れ落ちる自分の胸を見る。うん。アケミには負けるけど、たぶん標準サイズはあるはず。贅肉なんて演習で容赦なく削ぎ落されてるから欠片もない。全体的に小さめだけどバランスで勝負できる！

…なんだか急にそんな事考えている自分が恥ずかしくなってきた。真っ赤になりながら体を拭き、きちんと勝負下着をつけてからバスローブ（なんでこの程度の宿にこんなものが？）をはおり、すでに日も暮れて薄暗い部屋に入る。

「あ、あの、レックスさん…」

「サクヤか。上がったのかい？」

レックスは鎧を脱いでベッドに腰掛け、何か難しそうな本を読んでいた。その姿が、今までの剣士としての姿とギャップがあり新鮮だった。

サクヤは真っ赤になりながら言った。

「あの、私、やっぱりレックスさんの事が好きで…。この前は…キヤッ！」

「ありがとう、サクヤ。受け入れてくれてうれしいよ」

レックスはサクヤのセリフを遮ると、そのままベッドに押し倒した！

「ちよつ、レックスさん、そんな急に…！！」

サクヤがレックスを押しとどめようとその胸を押し返すと、そこにはやわらかい感触が…。

えっ…！

「もうこの街には私と関係を結んでくれる新しい女の子がいなくなってしまうて、リーボンまで行ったのは大成功だった。こんな愛らしいサクヤに出会えたんだから…」

「も、もしかして、レックスさんで…」

女の人？

「レ、レックスさん！私は普通にノーマルな恋愛がしたいと…」

「安心して。二度と逃れようと思わないような快感を与えてあげるから」

そ、そんな！

「い、嫌ああー！ー！」

次の瞬間、サクヤは巴投げの要領でレックスをベッドから叩き落とす！

家具か何かが壊れる轟音を背景に、そのままバスローブをまとって廊下へと飛び出した。

そこには、

「ア、アケミ！」

「あら、サクヤ。どうしてこんなところにー」

偶然にも、アケミが廊下にいた。

大げさに驚いた顔をしているアケミ

「みんな搜してたのよー」

「そ、そうなの！？」

アケミの言葉を聞いて、ありがとうと言いながら泣きつくサクヤ。背の高いアケミに抱きついていいるせいで、アケミの浮かべている黒い笑みに気がつく事はなかった。

「その少女を渡してもらおうか」

そこに、部屋から服が乱れて色っぽくなったレックスが現れる。その姿は、今となつては完全に男装の麗人にしか見えない。それほど男としての演技がうまかったのだ。しかし、

「ダメよ！サクヤは私達のリーダーなんだから」

アケミのその言葉に、まだ自分をリーダーと認めてくれるのかと再び涙があふれ出すサクヤ。

アケミは手元の杖を構えながら、レックスに宣言する。

「どうしてもというなら、力づくで突破しなさい！」

それを聞いて、すこし考えるレックス。そして、

「仕方あるまい。本人の意思を無視するのは私の本望ではないからな。また改めて出直すさ」

そういうと、颯爽と部屋に戻って行った。その背中が、またいつか来ると語っていた。

レックスがいなくなり少し落ち着いたサクヤは、そこではっきりアケミの顔を見た。

「アケミ、そのクマはどうしたの？ 凄い顔になってるよ」

「サクヤの事、必死に探してたからよ」

でも、見つかったんだから構わないわ。

嘘は言っていないが、真実とも少し違う。この女に良心の呵責という言葉は存在しない。

そのアケミの言葉に再び涙腺が緩むサクヤ。

そのサクヤに、アケミはギルドの仮証を差し出した。

「ほら、これがサクヤのギルド証。まだ仮証だから今すぐギルドに行って正式なのを受け取りましょう。もちろん、チームリーダーはサクヤで登録したからね」

「うう…、ありあとうアケミ！」

泣きながら感謝するサクヤの背中を押して歩くアケミ。
気がつくと、部隊の面々は全員がそこに揃っていた。全員が、目の下に濃いクマを作っている。

「探したぞ、サクヤ」

「サクヤ隊長、これから隊長お願いします！」

「…待ちわびた…」

「み、みんな…！」

その言葉に、感激するサクヤ。ああ、どうして私はみんなを捨てようなんて思ったのだろう。こんなに素晴らしい仲間なのに！
えぐえぐ泣きながらみんなに背中を押されて歩くサクヤ。

残念な事に、ギルドの受付に向かうアケミ達に向けられる妙な視線に、サクヤは気がつかなかった。

受付には、すでに日も沈んでいたが人が残っていた。

「すいませーん！ギルドの仮証を正式なものに代えてもらえますか」

「はい、かしこまりました」

受付の女性は快くそれに応じてくれた。

そして、

「では、『戦場の絆』のリーダー、サクヤ様、こちらが正式なものになります」

受付がそう言った瞬間、ギルドの酒場の空気が変わった。

「は、はい！ありがとうございます！」

そして、サクヤがそのカードを受け取った瞬間、周囲を筋骨隆々の男達に囲まれた。

「????」

突然の事態に、反応できないサクヤ。そこに、質問が浴びせられる。

「お嬢ちゃんがあのアケミ達のリーダーでいいんだな？」

「????そうですけど、何か？」

「連中のツケ、18シルビー払ってもらうぜ」

「え？」

次の瞬間、周囲の人垣から俺も俺もという声が響き渡る。

「この前の昼飯代3シルビーね！」

「こっちは服代27シルビー！」

「俺は……」

「当店の……」

「え、え、えー！ー！」

突然の借金回収に大混乱のサクヤ。

慌てて周囲を見渡すが、さっきまですぐ後ろにいたアケミ達の姿は煙のように消え去り、影も形もなかった。

「ま、まさか！」

最後の頼みでギルドの受付の女性をすぐる様なまなざしで見る。受付のお姉さんは、にっこり笑って言った。

「チーム『戦場の絆』はギルドに、総額352シルビーの借金がございます。返済期限が迫っておりますので、お早めにお願ひします」

ようやく、サクヤは自分が嵌められた事に気がついた。

「ひ、卑怯者っ！」

借金総額478シルビー。皇国円換算、四百七十八万円。
逃走の代償は、大変高つく事になった。

幕間く影と過去とく（前書き）

唐突ですがシリアスが入るのです！

幕間く影と過去と

「さて、サクヤはあのギルドに縛り付けたし、こっちはこっちで懸案を片付けるわよ」

時はサクヤがギルドで男達に取り押さえられたころ。隠蔽魔法でサクヤから逃れ、準備しておいたセーフハウス（二カ月契約で賃料は57シルビー。全額が借金に組み込み済み）に入り、魔法阻害のトラップを起動しサクヤが魔法で逃れるのを阻止したところである。

「今回はいつになく強引だな。いったい何があった？」

アキラがアケミに問いかける。アキラはこの街に来てトラップの準備をしている時に、アケミの行動がサクヤを捕える事以外にもあるように感じていた。長年の付き合いのおかげである。

「サキの魔法の履歴を見たら、どうも妙なだよ」

アケミが真剣な表情で言った。

「確かに転移魔法を発動した時、魔力異常は発生していたの。でも、それだけでは皇国領外まで飛ばされるとは思えなかったの。それで、サキと一緒に履歴を解析したら、気がつかないくらい僅かだけど外部から術式に介入されてたの」

「それはつまり？」

「ええ、私達は誰かに意図的にここまで飛ばされた可能性があるわ。しかも、今も皇国の基準石は認識できない。これはいくらなんでもおかしすぎるわ」

全員が、普段のおちやらけた姿からは想像できない真剣な表情でアケミの話を聞いている。

「だが、それではサクヤをここに縛り付ける理由が借金以外に見当たらないぞ」

アキラの疑問は全員の疑問だった。

「あの子の杖は特殊回線オーバーラインで本国とつながっている可能性があるわ。今回の動きが政治的なものだったらこっちの動きが筒抜けになるのは危険だわ」

たとえサクヤがどう思っているにせよ、とアケミは付け足した。

サクヤが持っている恩師の法杖は常時保持を義務付けられると共にいくつか他の杖にはない特殊機構を持ち、中には詳しい機能が公表されていない物もある。この中には特殊回線オーバーラインも含まれる。これは特殊な変調魔力波を用いて結界などを透過して情報を送信する機能だと言われている。

「なるほど。だからロイドをイースに残したのか」

アケミ達の奴隷と化していたロイドは、アケミの命令でサクヤの様子を見守る事になっていた。

「そういう事。万に一つも私達の居場所を探られてついてこられたら、どんな情報が漏れるか予想もつかないわ」

話を聞いたサツキが感心した表情を浮かべている。いままでのふざけた様子からは想像もつかなかった。

納得した様子のアキラが、尋ねる。

「それで、今後の予定は？」

アケミは懷から一枚の羊皮紙を取り出した。

「ギルドの依頼で面白いのを見つけたわ」

書かれた内容は遺跡の調査と同行する研究者の護衛。

「これがどうしたんだ？」

「ここを見て」

アケミが指さしたところ。そこには先遣調査隊が撮影した遺跡の
転写画の一枚 入口付近を拡大した物 がのっていた。

「これは…『籠目』？」

「そう。サキとも話し合ってまず間違いないと思うわ」

『籠目』とは五芒星と並んで魔法の象徴的記号。正三角形を二つ逆
さに重ねた六芒星であり、守りの記号として用いられる。

「この周りの文字は古式の術式なのは分かったけど、内容までは分
からないわ。でも、サキが以前国立図書館で見た事があるそうだか
らうちの国の術式なのは間違いないわ。しかも…」

「…おそらくまだ術式は生きている…」

そこでサキが口を挟む。自分も一緒に考えたのに、アケミだけが
しゃべるのが不満なようである。

「あの、すみません。私には話がよくわからないんですが…」

サツキがおずおずと手を上げる。その疑問に、アキラが答える。

「つまり、この施設は皇国の技術が使われていて、もし設備の一部でも生きていれば　　トラップが生きてるんだから平気だと思うが　　こちらの情報を漏らす事なく本国の状況を知る事が出来るかもしれないってことだ」

そうだろ？とアケミに確認するアキラ。

「ええ、そうよ。少なくとも、イースに在る間は『電電』を含め一切のこちらへの探知は観測されてないわ。つまり、こちらの状況が本国に知られていないという事よ。これは私達にとって最大のアドヴァンテージよ。これを最大限に活用する必要があるわ」
「なるほどな」

うんうんとうなづくアキラ。

そして付け足す。

「そのほとんどはイースに着いてトラップの設置を終えてから気がついただろ？」

ギクリ、という表情を浮かべるアケミ。

そして、少しばつの悪そうな顔でそっぽを向いて言った。

「私だって、少しやり過ぎたと思ってるわよ！」

「それならいい」

「大体アキラだって嬉々としてトラップ作ってたじゃないの!？」

「そもそも俺は借金なんてしてないんだがな」

上手く話をトラップ設置から話すアキラ。ついでにアケミに協力した理由は最後の一线を超えないようにするため。基本的に自分から積極的に動く事はないのだ（ついでにノリはいい性格）。

「とにかく!」

この会話をなかった事にすべく、大声を張り上げながらアケミが言う。

「これからしばらく、小隊の指揮は私が執るわ。今回の遺跡の調査を含む本国の状況が把握でき次第サクヤを迎えに行くわよ!」

「了解!」

「…（こくり）…」

そして、依頼書を見たサキが付け足す。

「…この依頼、Aランク以上の指定がある…」

「…「えっ…」」

その後、喧々囂々たる議論（ギルドカードの偽造から、ギルドへの直接要請（脅迫ともいう）まで含む）の末、ガルシア達の名前を借りる事に決めたのだ。

もちろん、ガルシア達本人の意思はあっさり無視された（いつもの事）。

深夜。

サキとサツキのお子様組が寝付いた後、アケミとアキラは二人で場末の酒場を訪れていた。

アキラは女二人組だと面倒が起きると判断して珍しく男装している（改めて、アキラは男である）。

薄暗い酒場のカウンター席に座った二人は、濁った葡萄酒を口にしながら部隊の他の三人には聞かせられない会話をしていた。

「今回の事、やはり『拡張派』の仕業だと思うか？」

「たぶんね」

アキラの質問にアケミが答えた。

「だけど、目的が分からないわ」

「『橘』の家が関係している可能性は？」

「もしかしたらそうかもしれないけど、私は別に後継者の筆頭つてわけでもないし軍での地位も底辺に近いわ。近衛の親衛隊にいた頃ならまた違ったかもしれないけど」

酒のまずさに顔をしかめながら、アキラを疑わしそうな目で見ながらアケミが返す。

「むしろあんたの方がやばいんじゃない？第一師団にいた頃、なんかやらかしたんじゃないの？あそこは『拡張派』と『守旧派』の入り混じった状況よ。それこそ政治不介入が徹底されてる近衛よりまずいかもしれないわ。たぶんあんたの師範就任も裏で色々あったはずよ」

「まあな」

嫌そうな顔をしながら、アキラは認めた。

「本当は後二人、両派から候補が出てたんだが、両方とも闇討ちを食らって『選定の儀』に出損ねてな。結局残った俺は両派とのつながりが無くて、折衷案として就任させられた節がある」

「なるほどね…」

皇国の国内事情は複雑な状況を呈している。

まず、軍部は陸海空の三軍に近衛を加えた四者で、予算の取り合いなどで仲が悪い。ここまではよくある事だし、議会と皇族の仲介でそれほど深刻な状況ではない。

問題は、それぞれの軍内部での対立だ。海軍では『艦隊派』と『航空派』。空軍は『決戦派』と『温存派』と呼ばれる戦略上の意見の対立が存在し、艦隊や戦隊の司令といったポストを奪い合っている。

そして、議会や世論にまで影響力を広げ、深刻な対立に発展しているのは陸軍だ。

陸軍内部では、魔物が多数生息する本土周辺を捨て、より安全な大陸への進出を目指す『拡張派』とあくまでも現状を維持し、これまでもどりの島嶼への緊急展開能力と本土の水際防衛をその主戦略とする『守旧派』が激しい対立を続けている。

そして、サクヤ達独立魔装小隊の立ち位置は独特だ。

所属は陸軍だが、実際は空戦魔導師を多数有し、空軍との人材交換も盛んに行われている。

さらに、遠隔地への派遣も多いため、移動手段として海空軍の艦隊との関係も深い。合同作戦も頻繁に行われている。

ゆえに、両派閥もここには手出しできずにいた。下手に手を出して海空軍のどちらかが敵に回ったらその派閥は明らかに劣勢になる。最悪、陸軍と海空軍の間の対立が深刻になり本土防衛に支障をきたす。それを回避するだけの理性は両派にもあった。

つまり、昇進は難しいが、派閥争いに巻き込まれる恐れは少ないのが彼ら独立魔装小隊なのだ。

「…もしかしたら、中島隊長が何かやったのかもしれない…」
「あの狸じいね」

二人の脳裏に浮かぶのは、小隊の直接の上司である中島勘助中佐。なかしまかんすけ
サクヤは面倒なボケじいとして相手をしているが、かつての戦いぶりを知っている二人は警戒を怠らなかつた。実際、こちらに回される任務は、いかにも拡張派と守旧派が縄張り争いをしそうな任務ばかりだった。サクヤが無造作にヤバイ行為をしようとするのを、気がつかれないように阻止するのは大変だった。

「しかし、この部隊には政治に強い人間がないから面倒だな」
「そうね」

なにしろ、アケミがここに来るまえに所属していたのは政治介入が厳に戒められている近衛、その中でも特に政治色の強い皇女殿下親衛隊である。へたに知識を仕入れただけで危険分子として処分されかねない危険地帯だった。

アキラのいた第一師団は逆に派閥争いが激しすぎ、一度知つたらどこまで巻き込まれるか見当がつかないという意味で危険であり、そのためにアキラも一切の関わりを拒否する姿勢を貫いていた。

サクキはまだ十歳、サキも十二歳と幼く、政治闘争には関わっていない。
そしてサクヤは…

「…あれは危険すぎるわね…」
「ああ…」

怒りと憐れみの混じった目で、壁を見つめるアキラ。

「サクヤの奴は雲母クモの出身だ。一度関わったら、二度と引き返させる事が出来なくなる」

雲母孤児院。

皇室が直接運営する孤児院。

世間では、皇室の慈悲の象徴として高く評価されているが、その実態は黒い噂の絶えない組織だった。

各界に著名人を多数輩出する裏では、非道な人体実験や暗殺訓練、運営費確保のための臓器売買まで行われていた。

サクヤはその最後の卒業生。

状況を把握したまだ当時六歳の皇女殿下率いる特殊部隊が、第三皇子が運営していたその施設を強襲した時に救出された唯一の少女。同い年の少年少女の死体の中で、血まみれで立っているところを救出部隊が発見した。

皇女殿下の取り計らいで、記憶を失ったサクヤは雲母クモにいた形跡を抹消し、普通の少女として事情を知っている近衛を退役した軍人に預けて育てられた。

当初は記憶が無い事を不安がり色々大変だったが、しばらくすると、普通の少女としてすすく育っていった。

しかし、消せなかった物もある。

『坂下』の名字は宮城の大手門の外にある長い下り坂の果て、そこに存在する秘匿施設にちなんで雲母クモ出身者でも暗殺者につけられた名字だ。サクヤの名も、ただ398番という番号だけで呼ばれていたからそうなったものだ。

サクヤはどれほど言っても、この名字と名前以外には反応しなかった。大きくなって親と名字が違っても一向に不審に思う様子すらなかった。

それほどに、呪縛は強かった。

「あんたは確か救出戦の時、サクヤに斬り殺されそうになったんだ

つけ？」

「正確には、突入部隊の先陣もろとも風魔法で角切り肉にされかかったただけだ」

サクヤと同年のアキラは、当時まだ勢力の弱かった皇女殿下が頼みの綱として頼った皇室剣術顧問の加藤家の一員として強襲部隊に加わった。

ついでにアケミも、近衛の重鎮である『橘家』の一員としてこの事件のもみ消し工作の一部始終を見ていた。突入ではアキラの後から救護部隊として入り、気絶しているサクヤを運び出している。

もちろん、その時の事をサクヤは覚えていない。士官学校で再会した時、アキラは一発で分かったがサクヤの方は全く気がつかなかった。

「上の連中には、サクヤの事を知ってるやつがいなくても限らないし、下手にこの事を政治で利用されたらやばいわ。ある意味で魔力リアクター・ボム^{マジック}で魔力的に匹敵する政治的武器になりかねないわ」

事態のもみ消しは近衛が行い、そしてそれに関与した全員が『沈黙の誓い』^{じま}を立てている以上、そこから外部に漏れる事はありません。

だが、あの後の第三皇子の失脚を考えれば、そこからたどり着く人間がいなくても限らない。

「まったく。厄介な事になってくれたな」

「ま、いつもの事だけだね」

そして、少し嫌そうな顔をしながら、不味い葡萄酒を飲みほしてアケミが言った。

「どっちにしろ、本国の状況も分かんないのに議論しても駄目ね。さっさとあの依頼を受けて、本国の状況をどうにか探りましょ」
「そうだな」

同じく飲み終えたアキラがうなずく。
そして付け足す。

「ついでに、なんでわざわざギルドの依頼を通すんだ？依頼と関係なしに行けばいいだろうに」

「…お金がほしいからに決まってるでしょ！？」

結局最後はこれだった。

幕間く影と過去とく（後書き）

また次回からどたばたなのです！

目指せ借金完済！～ウェイトレスサクヤ～1

蒼龍は龍種でも特に危険な存在だ。

高度な飛翔魔術を駆使し、射程の長い凍結系魔法を連続で使用する強大な魔物だ。

その危険は、飛んでいる時より地上に降りている時の方が実は大きい。

本来飛行に使用している魔力も攻撃に振り分けて、強大極まりない風魔法を放ってくるからだ。

魔法士官学校では、もしこれと遭遇した場合基本的には退避を選択、もし逃げ切れない場合は火焰魔法を頭部に集中して浴びせ視界を遮った上で翼部に神聖魔法を放ち飛翔魔術をキャンセルするように教わる。

もつとも実際は…

「おい小娘！何サボってやがる！七番テーブルにビール大8！十二番に樽一つ！」

「こつちも注文よろしく！」

「は、はい！すぐ参ります！て、樽！？どうやって運ぶんですか！？」

そう、私サクヤはかつて蒼龍の追撃からも単独で逃れた魔法士官学校のエリート。戦術、戦略、兵站、その他全ての知識をまんべんなく身に付けた精鋭。

それなのに、それなのに！

「おお、ずいぶんカワイ子ちゃんだな」

「キャッ！お尻触らないでください！」

なんでギルドの酒場でウェイトレスの仕事をしなきゃならないの！

話は、ギルドのカードを受け取った場面までさかのぼる。

アケミ達にツケのある男達は、サクヤを逃がさないようにがっかりと退路をふさいで金を出せと詰め寄っている。

「お嬢さん、こちらら商売なんだ。きちんと払ってくれないと困りますんで」

「で、でも。私一文無しで……」

「それなら夜の街に立ちんぼしてもらおう」

「立ちんぼ……？えっ！そんなの嫌です！」

「選択肢はないな」

イヤア　　！

悲鳴を上げながら引きずられていくサクヤ。魔法で逃れようとするが、強力な妨害を受けて何も発動できない！アケミめ、そこまでやるのか！？まただ！また嵌められた！もう誰も信じない！

激しく絶望しながら引きずられていると、ギルドのお姉さんがさすがに気がとがめたらしく、男達に声をかけた。

「みなさん、女性に乱暴するのはさすがに見逃せません。それ以外の方法で借金を取り立てて下さい」

思わぬ助け船に、涙があふれるサクヤ。なんだか最近泣いてばかりの気がする。

男達も、自分達の言ってる事が乱暴なのは分かっていたのか、頭

を？いて困っている。

「しかし、どうやって借金かえしてもらおう？」

「あの四人には絶対関わりたくないしな」

「このお嬢ちゃんだけが頼りなんだが…」

男達も、それぞれに仕事を持ち家族を養う必要があつてこういう手段に出ていたのだ。乱暴する事が目的ではない。

その時、サクヤにとってトラウマになっている声が響いた。

「だったら、ここの酒場で働かせてやればいいだろう」

「レ、レックスさん！」

受付の女性が顔を赤らめながら叫ぶ。周囲の男達も尊敬のまなざしでレックスを見ている。サクヤだけは騙された、騙された、と頭を壁に打ち付けている。間違いなく、消去したい記憶の一つなのだろう。

「ギルドの酒場で最近サリナさんがウェイトレスを止めて人が足りてないはずだ。その欠員を埋める形でやればいい。逃走も防げて一石二鳥だ」

「確かに。それなら問題ありませんね」

「まあ、お嬢様がそついうのでしたら、こちらにも異存はありませんが」

こうして、サクヤのウェイトレスの日々が始まったのだ。

「ふう」

こうしてウェイトレスを始めてから早一週間。

客が途切れたところで、サクヤはカウンター席にもたれかかった。なれない接待はサクヤにとってかなり大変だった。ここはギルドの荒くれ者が利用するから隙を見せれば胸やお尻を触られるし、料理を間違えて運べば怒鳴られる。あげく連れ込み宿に連れて行かれそうになった（もっとも、それは酒場のマスターが実力行使で追い払ってくれたが）。

「どうした、サクヤ？もう疲れたのか？」

「…体はそれほど疲れませんが、やっぱりこういうお仕事は慣れてなくて…」

なにしろ、士官学校でこんなことは教わらない。いかに効率よく魔物を殲滅するかや味方の損害を減らすかを思春期の大事な時期に学び続けたのだ。サクヤは特に対人関係が苦手だった。アケミやアキラは数少ない例外である。いや、あった。

「一体いつまで働けば、借金返せるんですか？」

サクヤの愚痴に、マスターは太い腕を組んで考える。

「うむ。毎月の給料から部屋代と服代、そういうのを差し引くと…ざっと三年くらいだろう」

「三年も！」

そんな！私は一刻も早く本国に帰らないといけないのに（レックに恋していた時の自分は完全に忘却している）。

「どうにかならないんですか!？」

「そう言われてもな…お嬢ちゃん、夜の仕事は嫌なんだろう？」

「当然です!」

マスターも考え込む。なにしろ仲間に借金、の形として置いて行かれたサクヤである。多少の同情はマスターにもあった。

「私が料理したら、少しはお給料あがりますか？」

「却下。俺は酒場を廃墟にする気はない」

一度サクヤが厨房に入って火事を起こしかけたのである。本人いわくちゃんとした料理^{チャーハン}だったそうだが、あんな大火力を家の酒場で使われてはいつ火事が起こるか分からない。

マスターの言葉に慥然とした表情を浮かべるサクヤ。

「それなら、他に何かありませんか」

「何かと言われてもな」

その時、酒場に新しい五人組の客が入ってきた。

「いらつしゃいませ!」

即座にサクヤはカウンター席から立ち上がり、テーブルに着いた男達に注文を受けに行った。

その時、マスターは何か不穏な気配をその五人組の男達に感じた。

「おいサクヤ…」

「いらつしゃいませ。ご注文は何に致しますか？」

しかし、マスターの警告は間に合わない。

「小娘、ちよつとこつちこい」

「ひゃっ！」

突如、男達はサクヤの腕を後ろ手にひねり上げて、その首筋にナイフを突き付けた。

「なあマスター、俺達は今ちよつとばかり金に困ってるんだ。できれば少しばかり融資してくんねーか？」

「そうそう、いつかきつと返すからさー」

「なにしろあの世は極楽で、いくらでもお宝があるらしいからな」

下品に笑う男達。それを酒場のマスターは蒼白な顔で見つめている。

「お、おい！あんた達！自分が何してるかわかってるのか！？」

「ああ？もちろんちよつとした頼みごとだよ。なあ？」

「そういう事じゃない！その娘はレックスの…」

コキユンツ。

その時、奇妙な音がサクヤのひねられた肩から響いた。

サクヤの腕をひねっていた男が、手に伝わる奇妙な感覚にサクヤを見ると、サクヤは自分で肩の関節を外して拘束を逃れべたりと床に座っていた。

「こいつ、どうやって…！」

驚愕する男達をよそに、サクヤは俯いてなにやら呟いている。

「…どいつもこいつも私の事を馬鹿にして…！私だって戦えば強いのに、みんな何も聞いてくれなくて…。がんばってお仕事してるのに…。なのに、なのに…！」

「は？」

暗い表情で恨みつらみをぶつぶつ呟くサクヤ。外れた肩と合わせでかなり不気味だ。

「あぐく乱暴しようとするし…。もう許さない…！」

次の瞬間、サクヤの背後に無数の魔方陣が無詠唱で発生する。

「ゲッ…！」

目の端に涙を浮かべながら、サクヤは指先を自分を拘束しようとした男達に向ける。

「みんな吹っ飛べー…！」

次の瞬間、酒場は色とりどりの閃光で内側から破壊の限りを尽くされた。

店の外にいた人たちは、いきなり吹っ飛んだ酒場に啞然としている。がれきの中にはボロ雑巾と化した男達の姿もある。

「…はっ！私は一体何を…」

そして、半ば以上廃墟と化した酒場の中で、ようやく正氣に戻ったサクヤの肩をマスターがトンと叩く。その肩を掴む力はどんどん強くなって骨をミシミシ言わせている。

「マ、マスター…？」

やってしまった！という表情を浮かべたサクヤは、肩の痛みと恐怖に顔をひきつらせながら恐る恐るマスターの方を振り返る。

マスターは額に青筋を浮かべながら、この上ないイイ笑顔を浮かべていた。

「…お前はどうかやら用心棒の仕事もできそうだな。今度からその分の給料は上げてやろう。よかったな、念願かなって」

「あ、ありがとうございます…」

一応、感謝の言葉を述べるサクヤ。どうにかマスターから逃れようと動くが、肩を掴んだ手は微塵も動かない。

「だが！」

次の瞬間、マスターは憤怒の形相を浮かべて怒鳴った。

「貴様の借金にはこの酒場の再建費も加わった！これから一生タダ働きだ！」

「そ、そんな！」

「そんなもこんなもあるか！今から奴隷登録に行くぞ！」

「い、嫌！必ず返済するから許して下さい！」

必死に許しを請うサクヤの襟首をつかんだマスターは、そのまま引きずるようにして市の奴隷登録所にサクヤを引きずって行った。

借金総額二千三百五シルビー。皇国円換算2305万円。

完済の道は、遠く険しかった。

その頃、アケミ達は…

「それで、用件はなんですか？」

イスから少し離れた町の料理屋で、以前リーボンまで一緒に行動した傭兵団『フツの神剣』のガルシアと、商人のフロストに会っていた。

ガルシアは苦虫をダース単位で噛みつぶしたような表情を浮かべ、フロストはひきつった笑顔を浮かべている。

「いやー、私達の生活費が底をついちゃって」

その二人の正面に座ったアケミはあっけらかんと言った。仲間に見捨てられた後、サクヤは即座にギルドにあるチームの口座を封鎖。アケミ資金を断っていた。これ以上借金を増やされるのはまっぴらごめんだった（もつとも、自分で数倍に増やしてしまったが）。

「そこで、二人に頼みがあるのよ」

ものすごい警戒の表情を浮かべる二人。まさか生活費をよこせというのか。そうしたらこいつらは絶対に返しそうにない。サクヤさんがいないんじゃないかと危険だ！

「安心して、別にお金を借りに来たわけじゃないから」

そう言って、アケミは一枚のギルドの依頼書を見せた。

「私達はこの依頼をやりたいたんだけど、ランクが足りないのよ。だからこれをガルシアさんが受けた事にしてほしいのよ」

簡単でしょ？と笑うアケミ。その依頼書を見たガルシアは目を剥いた。

「ちよっ！こんなのどうやって片付ける気なんだ！？」

その依頼は、遺跡の調査と、同行する調査員の護衛だった。報酬は三万シルビー。一人が一生遊んで暮らせる額だ。

だが、その内容は危険極まりない。

先遣偵察を行ったギルドの職員の報告では、なんでも内部には大量の魔物が生息し、さらに危険なトラップが多数設置されているとのこと。

しかも、最後にとんでもない一言が付け足されている。
竜種の生息可能性大。

この最後の一言でガルシアは一発でやる気を失った。
なにしろ竜である。下手をすれば単独で町を滅ぼしかねない超危険生物である。そんなものをまともに相手にする気にはとてもなれなかった。

だが、アケミは笑顔を崩さない。

「大丈夫。私達が戦うから、ガルシアさんは名前を貸してくれるだけでもいいわ」

「だが、そんな事をしては我々の信用が…」
「名前を貸して？」

拒もうとするガルシアにこり押しするアケミ。ガルシアの額には汗が浮かんでいる。なぜなら、アケミの背後には待機状態に置かれた攻撃魔法が多数展開され、その照準をガルシアに合わせている。

その隣ではアキラが刀を手入れしている。いつの間にか周囲は結果に覆われ、同じ料理屋にいる人間もガルシア達の事を認識できなくなっていた。

(…これは、もしかしてすでに詰んでいる?)

「貸してくれるわよね？」

「…はい」

人は時に、暴力に屈するのである。

「で、では私はこれで…」

ここまで何も言われていないフロストが、冷や汗をかきながら逃げようとする。ガルシアのような目に会うのはまっぴらごめんだ！その肩を、アキラがガシッと掴む。

「フロストさん、そちらには別の事を頼みたいのだが…」

「…伺いましょう…」

犠牲者その2。

「なに、簡単な事だ。実は…」

その後、料理屋の一角でやけ酒に興じるガルシアとフロストの姿があったという。

合掌。

目指せ借金完済！～ウェイトレスサクヤ～2（前書き）

今回は、同時並行して行っている遺跡探検編なのです！

目指せ借金完済！～ウェイトレスサクヤ～2

サクヤが奴隷になろうとしていた頃、アケミ達は…

「へー、これが遺跡ね。思ったより新しいのね」

「…元々ゴンドワナ帝国時代に建設された代物らしい。制御できる人間が絶えて久しいから、こうして放置されて魔物の巣になったんだ…」

アケミの感心したような声に、どんよりとしたガルシアの声が応える。

場所は今回『フツの神剣』が依頼された遺跡調査任務の目的地である。

遺跡と言えはなんとなくジャングルの中にそびえたつピラミッドのようなものを想像しがちだが、この遺跡の入口は蔦や雑草に覆われはしていたものの、いまだに錆びる気配もない未知の金属でできていた。本体は地下にあるらしい。

「うわー。第二種金剛装甲なんて初めて見ました！」

「…これなら最新の薄層ミスリル装甲の方が強度は高い…」

それを見てサキとサツキが感想を言う。どちらかと言うととんでもない骨董品を目にした一般人の感想だ。

「なんという物だ…！ぜひ引き剥がして持って帰りたい…！」

感動の面持ちで呟くのはアキラ。実は隠れ武器マニアである。

「どうでもいいから早く仕事を終えて町に戻りましょう」

やる気なさげなのはもちろんアケミ。周囲のじめついた空気に、シャツの襟をパタパタやっている。

ここまでの道は最寄りの街道筋からけもの道に入り、さらにそこから道なき道を延々半日歩くという非常にめんどくさいものだった。ついでに各種魔物も生息。

そのため、わざわざ山登りの装備まで整えた傭兵団（依頼内容は自分たちで全部やるとアケミは思ったが、そこは傭兵団のプライドが許さなかった）だが、歩くのを嫌がったアケミは、サツキの大規模支援魔法『天翔』で全員を浮遊させ空を直行するという選択をした。

突然の事態に驚愕する傭兵団員といななきを上げる馬達。それを一切無視して、サキの空力防御魔法の保護の元、半時で街道から遺跡まで着いてしまった。

今は混乱した馬達を団員がなだめ、山登りのため軽装にしていた鎧を馬車に積んである重装備の物に換装している（元々見張りとともに街道に置いておく予定だったが、まとめて運んでしまった）。

団員達はそれほど衝撃を受けているようには見えない。正確には、考えても無駄だと思わしき思考停止している。基本的にガルシア以外脳筋連中なのだ。

「いやー！まさかこれほどの魔導師どのを抱えているとは。この傭兵団は素晴らしいな！」

まだ衝撃が抜けきらないガルシアに声をかけて来たのは、今回の依頼者で同行する調査要員であるレイモンド・バーク。がっしりとした体格の戦士のような初老の男であるが、実際は大商会の会長を務めている。

すでに第一線は退き、今は趣味の遺跡探検を行っているそうだ。

「なにしろここの護衛はなかなかみつからなくてな！貴殿らがようやく名乗り出てくれて助かったぞ！」

もし後一日出てこなかったら取り下げようとおもった所じゃ、というレイモンドの言葉を聞いてなぜ後一日早く撤去してくれなかった！と、内心悲鳴を上げるガルシア。時は金なり…少し違うか…。

「いいえ。私達は傭兵団の所属じゃないの。今回だけの雇われよ」

そう訂正したのはアケミだ。

「今回だけ、竜種の対応を任されてるわ」

そう、事前の相談でアケミ達は基本的に竜が現れた時だけ対応する事になっている。どうせ傭兵団がついてくるなら目いっぱい使い尽くそう（使い潰そう？）という魂胆である。

「おお！それほどの實力をお持ちなのか！できればお名前をよろしいかな？」

「私はアケミ。部隊名は42…『戦場の絆』よ」

一瞬、部隊名を言いそうになるアケミ。みなさん気がついてると思うが、この部隊番号『死になよ』とも読める非常に不吉な、普通なら欠番扱いの部隊番号なのである。とても人に言えるものではない。

「なるほど、これから覚えておこう！面倒な依頼はお前達に回すぞ！」

「まあ、適当に受けてあげるわ」

熱烈なレイモンドを、軽くあしらうアケミ。トラブルシューターはごめんだ。

「それにしても、不思議な鎧を身につけておるな！」

ハイテンションなレオモンドが、今度はアケミ達の鎧に注目した。アケミ達の鎧は全て拡張鞆から取り出した物だ。マジック・バック

それは普段の魔法防御服や物理防御服とは全く異なる物騒な印象の物だった。全体の印象としては、西洋の重装騎兵が身につける全身鎧を角ばらせたようなものだ。しかし、その背中フルの部分には大きな金属製の箱形の背面装備が取り付けられ、中には各種観測機器と攻防両用の多目的魔法戦闘補助システムが積まれ、それ用の魔法石は正・副・予備と三系統そろえた万全の態勢である。

肌は頭部しか露出しておらず、意志対応型三次元ディスプレイが顔の前に開いたり閉じたりを繰り返している。

皇国軍第一種特殊装甲防御服『がんがい岩鎧』

その高価さから独立魔装小隊以外では、各隊の指揮官クラスにのみ支給されている特殊兵装。

もはや鎧を着るといふより着られているに近い。

実際、背が高いアケミとアキラはそれなりに似合っているが、サキとサツキは完全に着られている。というか、XSサイズでもまだ大きすぎるようである。

「アケミさん！前が、前が見えないです！」

「……ずっと夜……」

「はいはい。あんた達は無理してこれ着ないでもいいから。壁役は私達二人でするわ」

「君達がそこまで装備を整えるという事は、それだけ竜が危険という事か？」

がちゃがちゃ鎧を脱ごうとする二人を助けるアケミ。こういったところは面倒見がいい。

そこにガルシアが声をかけた。

「ケルベロスをあれほど容易に撃退していたのに。それでも…」

「いいえ。これはむしろ遺跡のトラップ対策ね」

「なに？」

怪訝そうな表情のガルシアに、アケミが答える。

「いや、以前これに似た遺跡に進入した事があるんだけど、もうとんでもないトラップの山。サクヤなんて落とし穴の申し子みたいになつてたし、とにかく致死系のトラップが異常に多いのよ。だからその用心」

「なんだって…！」

二人の取り決めでは、竜が出るまでは傭兵団が先行する事になっている。

「君達、それを知って…！」

「事前に情報収集してないあんたが悪いのよ」

のうのうと言い放つアケミ。騙されたと呆然とするガルシア。とても突破できる気がしない。

そこに、依頼主のレイモンドが肩を叩く。

「ははは！安心しろ、これでもわしは百の選択肢があつたら一の正解を選ぶ強運の持ち主じゃ」

「レイモンドさん…」

「もっとも、一つだけのトラップだったがな！」

「それじゃ意味ないでしょ!？」

さらに不安を高めて終わった。

そうこうしているうちに、全員の準備が整った。

アケミとアキラはダークグリーンの装甲服『岩鎧』を身にまとい、サキとサツキはいつも通りの軽装。

ガルシア達傭兵団は、地上でまともに動ける最大限の装備を身にまとい、レイモンドは巨大な槌をもっている。

全員の準備が整ったところで、レイモンドが演説を行う。

「よし!今回はわしのために集まってくれてありがとう!これより、第一次遺跡探検を開始する!」

「おおおおっ!」

「よし、わしに続け!」

そしていきなり遺跡に突っ込んだ!

「はぁぁぁあ!？」

突然の突撃に驚愕の叫びを漏らすガルシア達傭兵団。

「ねえ、私この依頼受けたのやっぱり失敗だったかも…」

「いまさら言うな…」

アケミとアキラは空を見て嘆いている。

「は、早く追いかけないと見失っちゃいます!」

サツキが慌てた様子で叫ぶ。

「ぜ、全員！急いでレイモンドさんを追うぞ！」
「応！」

ガルシアの叫びに応じて、傭兵団の全員が狭い入口からメタリツクな輝きを放つ地下の遺跡へと突っ込んでいった。

「私達もいきましょう」

「そうだな」

「やった！迷宮探検ですね！」

体力のないサキとサツキをアケミとアキラの肩に乗せ、アケミ達も走り出した。一斉に迷宮に飛び込んでいく。
その全員が、最初の曲がり角を曲がった直後。

ガコンッ…

鈍い稼働音と共に、迷宮の入口は封鎖された。
もちろん、この事はだれも知らない。

同時に、迷宮の最深部で動き出したデジタル時計の存在も、表示されている時間は二時間三十分を示し、着実にその針を刻んでいた。

「はあ…はあ…はあ…。やっと追い付いた…」

「ははは！この程度で息切れするなんて、騎士として失格だぞ！？」

優に十分以上全力疾走したガルシア達は、ようやくレイモンドに

追いついた。

フル装備状態で狭い遺跡の通路で全周囲に注意を向けながら全力疾走というのは、ガルシア達傭兵団にとってかなりスリリングかつ精神的な耐久力を削る苦行だった。

ここまでトラップは予想に反して全くなかった。代わりに、無数の魔物とエンカウントする羽目になったのだ。三步歩けばワームが現れ、五歩進めばスネーク。十歩以上進めばその混成グループといった状況である。

はつきり言って雑魚ばかりだが、この数は馬鹿にならなかった。しかも、本来ならやり過ぎせるはずの魔物までレイモンドが叩き起こして行くせいで余計面倒になっていた（ついでにレイモンドは全力疾走してスルー。最悪のトレインもどき行為である）。

「みなさん御苦労さま。ここから先も先導よろしくお願いね？」

そう言ってから現れたのは、涼しい顔をして装甲服を身にまとったアケミとアキラ。その肩にはクッションを敷いてサキとサツキが乗っている。

この四人は、ガルシア達が完全に魔物を掃討した後をついて行っただけなので大して疲労していない。というか、装甲服には運動アシスト機能も付いているので全力疾走でも大してつかれないように出来ている。

「君は私達のこの状態を見て、よくそんな事を言えるな!？」

ガルシアが叫ぶような調子で言う。

すでに傭兵団の鎧はワームの吐き出した酸性の粘液で一部が腐食し、スネークの牙に傷つけられてとボロボロになっている。負傷者がいないのが奇跡だ。

「安心して。本当に危険だと思ったらすぐ前線に出るから」

ここでアケミがウィンク。脳筋の傭兵団員は一発でKO。やる気百二十パーセントである。

「うおおおお！やってやるぜ！」

「姉さん、前線は任せて下さい！」

「姉さんには指一本、いや、触手一本触れさせませんぜ！」

氣勢をあげる部下達に、いろいろあきらめた表情を向けるガルシア。どうして僕の部下はこんな脳筋ばかりなんだ…！

「それより、ここから先はどうするの？」

アケミが前面の通路を指して言う。

そこは道が二つに分かれたT字路だった。どちらの通路も大きな違いはなく、どちらを進むか迷うところである。

「こういう場合は基本的に戦力の分散は危険だ。どちらか一方を進んでなにもなければ引き返してこちらの道を確認するのが定石だ」
「さすがに慣れてるわね」

同じ意見のアケミもうなずく。もしここで二手に分かれるという意見が出たら、ここでガルシアとの縁は切るつもりだった。この先の状況が掴めないのに闇雲に戦力を分散させるのは自殺行為だ。馬鹿に巻き込まれるのはごめんである。

「それじゃ、進む方向はレイモンドさんに決めてもらいましょうか」
「そうするか」

レイモンドは、任せると胸を叩いている。

「わしはこういうとき、必ずこうやって決めるのじゃ」

そう言つて、手に持っている槌を床に立てる。

「なるほど。倒れた方に進むですね」

「案外普通の方法ね」

もつと凄まじい方法を取ると思っていたアケミとガルシアは感心の声を漏らす。

そして、

ガタンッ！

槌は真正面に倒れた。

「…これはやり直しか」

「そうね」

周りの傭兵達とアケミ達は、次の一手に注目する。
そして、

「ふおおおおー！ー！」

いきなりレイモンドは、槌に魔力を込め始めた。

「ちよっ！何するつもりですか！？」

「アキラ、取り押さえて！」

ガルシアとアケミの悲鳴が木霊し、アキラがダッシュでレイモンドにタックルを仕掛けようとする。装甲服でそんな事したら大惨

事だが、そんな事気にしてられない。
だが、その決断は一步遅かった。

「キャッスル・バスター
『破城』！」

次の瞬間、放たれた一撃は遺跡の壁面を貫通し、内部の機器を粉碎して反対側の並行して走っている隠し通路まで達した。

そして、

ガサゴソ…

その先から響く、妙に神経に障る音。

そして…

現れたのは、黒い脂ぎった甲殻を持った台所などの水場の悪魔。その異名『G』『ジョニーさん』など数知れず、恐竜より長生きしている地上最強の生物の一つ。

ゴキブリである。

しかも、完全に魔物化しており、その体長は一メートルを超え、口の前あたりにはクワガタの顎みたいなものまでついている。

そんなのが、貫通した穴から出て来たのだ。

「ヒッ…！」

さすがのアケミも顔をひきつらせ、完全に硬直している。

「消し飛べ！」

そこにガルシアが剣を叩きつける。

一撃で頭を粉碎された巨大Gは、しばらく足を蠢かしたあと完全に停止した。

一息つくガルシア。そのまま貫通した穴に背を向ける。
そこに、

ガサゴソ…ガサゴソ…ガサゴソ…
さらなる不吉な気配がやってきた。

「ま、まさか…！」

アケミが口元を押さえながら、悲鳴のような声を漏らす。
予感、最悪の形で当たった。

「嫌あー！ー！」

向こうから、出て来る出て来るゴキブリの群れ。あまりの数ゆえに隠し通路の向こう側で十重二十重に積み重なっている状態だった巨大ゴキブリ達は、唐突に開かれた楽園への扉に即座に殺到。黒い奔流となってアケミやガルシア達に押し寄せた！

「前衛急げ！盾で穴をふさげ！」

「火だ！火で一氣に焼き尽くせ！」

「馬鹿！遺跡の中でそんな事すれば俺達が蒸し焼きだ！」

大混乱に陥りながらも迎撃の姿勢を整える傭兵団。さすがに手慣れている。

一方、アケミ達独立魔装小隊は…

「きゃああああー！ー！」

悲鳴を上げたアケミが、肩にサツキを乗せたまま一目散に左の通路に逃走。

「待てアケミ！落ち付け！」

それを必死に追いかける、肩にサキを乗せたアキラ。サツキとサキは振り落とされないように捕まるのがやっとである。

「はっはっは！ワシの行く手を阻むなど、十年、いや、百年早いわ
ー！」

そしてハンマーを振り回しながら、自分で開けた穴に突っ込んでゴキブリの群れに消えていく、この状況の元凶たるレイモンド。

部隊は、ばらばらになった。

目指せ借金完済！～ウェイトレスサクヤ～3

この世界において、奴隷と言うのはそれほど虐げられる存在ではない。

なぜなら、それが雇用形態の一部として存在するからだ。

奴隷となる人間は、多額の借金を抱え、なおかつその返済の見込みがない者。それを債権者が専門の役場に連れて行き奴隷登録する。これによって、奴隷登録された人物は借金を返済し終えるまで一切の収入を債権者に差し押さえられ、代わりに役場の定めた最低限の生活費を債権者から支給されるという状態になる。

この間、奴隷は登録された町から出る事は許されず、特殊な魔道具で常に債権者に監視される状態になる。

具体的には…

「マスター！この首輪だけは勘弁して下さい！」

「ふざけるな！お前が撒いた種だろうが！」

…無骨な鉄製の首輪をはめられるのである。

「うつ…、どうしてこんな事に…」

「そ、それはやっぱりどうしようもないですね…」

三日ほどで再建なったギルド直轄のサクヤが働く酒場。

そこではサクヤが、昼のピークも過ぎて（この酒場は昼間も軽食を提供している。マスターはいつ寝ているの？）閑散とした酒場の

中で、なじみの客である青年に、愚痴を言っていた。

ロイドと言うこの青年は、サクヤが勤め出した頃から、毎日今のように暇な時間帯を見計らって酒場を訪れていた。

この時間帯はサクヤ以外のウェイトレスは夜のピークに備えて休んでいる事が多く、基本的にサクヤ一人で接客をまわしているので、自然この青年とも会話する機会が増えた。

いつも決まった軽食を注文する青年に、サクヤの方も心得ていて、店に姿を見せると注文をする前に調理を始めてもらっていた。今はその完成を待っているところである。

「いままで一緒に戦ってきた仲間には裏切られるし、借金はどうぞん増え続けるし、おまけに今じゃ奴隷だし……」

首輪を見て、悲しげなため息を漏らすサクヤ。この首輪には不可視の紐がつながっていて、主である酒場のマスターが念じるだけで、そっちに向かつて容赦なく引き寄せられる。

例えば……

「おいサクヤ！なに無駄口叩いてやがる！」

「ニヤッ！」

無駄口を叩いていて、料理の完成に気がつかなかったサクヤを、容赦なく引き寄せるマスター。まるで猫のような悲鳴を上げて、そのまま数脚の机や椅子に頭を激突させながら床を滑って行くサクヤ。最後にカウンターに頭を激突させて止まったサクヤに、その内側からカウンターの上に用意された料理を指さすマスター。

「ほれ、さつさと料理を持っていけ」

「いくらなんでも酷すぎませんか!？」

頭に巨大なたんこぶを鏡餅の様にいくつもつくったサクヤが、涙目でマスターに訴える。

「せめて声ぐらいかけてくれたって！」

「なんどもかけたわ、このド阿呆！」

そのまま激論に突入する二人。

「……ははは。僕の料理は無視なんですね……」

二人の間で冷めていく料理を、悲しそうな目で見つめるロイド青年
アケミ達の派遣したサクヤの監視役 だった。

ロイドはリーボンに到着した時に覚えた感動は、今でも覚えている。

ロイドの実家はリーボンよりさらに西の、大陸の果ての地にある。そこは岩石質の貧弱な土壌ゆえに、まともな作物が育たない僻地。最果ての巡礼地を目指すミナス教徒の巡礼者の落とす金と、荒れた海から命がけで掴み取る僅かばかりの産物。そして断崖に生える薬草で日々を過ごしていた。

ロイドはそんな僻地のさらに僻地に類する村の、村に一軒だけの小さな宿の三男として誕生した。

三男と言うのは、あまり歓迎される存在ではない。

長男は家を継ぐ役目を持ち、次男もそのスペアとしての役割を持たされる。だが、三男はいらないのだ。

成長するに従ってその事を肌で感じ始めたロイドは、家を出る事

が多くなった。

外でやったのは、村の獵師についての森での狩りだった。徘徊する魔物を避け、時には倒し、そして目当ての獲物を捕える。

「お前、筋がいいな」

寡黙な獵師のその一言が、ロイドがリーボンへ出る決断を下す一つの要因になった。

決定的にしたのは、ある時村を訪れたキャラバンの言葉だった。

「一人ぐらいたたら、雑用としてリーボンまで乗せてやってもいい」

ロイドはすぐに飛びついた。折しも諸国間の情勢は緊迫し、それが原因で巡礼客の客足も遠のいている状況で、無駄飯食らいが一人でもいるのは家にとって大きな負担だった。

家族はあまりいい顔をしなかったが、内心ほっとしているのははつきり分かった。このままでは本当に、ロイドの事を人買いに売り渡すことすら真面目にありえたからだ。

そこから雑用をしながらたどり着いたリーボンは、まさに圧巻だった。

街にそびえる巨大な塔。メインストリートに軒を連ねる数多の商店。市街地を埋め尽くす無数の低層住宅。そのいずれも村で生活しているでは一生見られない代物だった。

「傭兵…か」

すでに町での身の処し方は決めていた。ここまで連れてきてくれたキャラバンにも随伴していた傭兵だ。依頼を受けて凶暴な魔物を始末したり、危険な場所にある様々な物資を収集してきたり、そして時には国同士の戦争に駆り出される、究極の実力主義の職業。

名も無き村から出て来たばかりで、身元も確かでないロイドでは、これ以外に働く場所が無かったというのもある。

受付はあっさりと終わり、代わりに金属のプレートを渡された。その冷たい感触が、傭兵になったのだという事を実感させてくれた。

そして、親からもらった僅かばかりの資金と簡単な依頼の報酬で、リーボンに最低限の生活の拠点を築き武器防具も一通りそろえ、いざ本格的に本格的に活動しようと思った矢先。

「うちの仲間によってくれるじゃないの？」

原因は、つい投げ捨てたバナナの皮。
人生の落とし穴は、いつどこに口をあけているか分からないものである。

怒鳴りあいから殴り合いにエスカレートしたサクヤとマスターの様子を見ながらため息をつくロイド。すでに料理は完全に忘れ去られている。

（本当に、どうしてこうなっちゃったかな…）

バナナの皮を落とす事故から始まり、わけのわからない借金押し付け計画に参加させられ、今では間諜のような事をやらされている。

「食らえクソマスター！」

「甘いんだよ！足元が御留守だぞ！」

店内に響く破壊音。

それを意識の外に置いて、再びため息をつくロイド。

「これからどうしようかな…」

「ロイドさん避けて！」

「!？」

いきなり、投げ飛ばされたサクヤがロイドの背中に突っ込んだ！
派手な破壊音とともに、椅子の残骸ごと床に叩きつけられるロイドとサクヤ。

「いつつ…!」

苦痛の呻きを漏らしながら立ち上がろうと手を床につくロイド。
むに…

だが、そこには床の堅い感触ではなく…

「あ……………!」

サクヤの形のよい双子山があった。

身動きが取れなくなり硬直するロイド。

そして、いきなりの事に混乱したサクヤだが、状況に気がつくと、
その顔を急激に赤くしていく。

「あ…あ…あ…!」

「いやこれは決してわざとでは…」

言い切る事は出来なかった。

「ロイドさんのエッチ　　！」

次の瞬間、目の前に浮かんだ無数の魔方陣を前に、絶望のため息を漏らすロイド。

（本当に、どうしてこうなるかな…）

「吹き飛ば　　！」

その瞬間、めくるめく閃光が酒場の中を埋め尽くした。
それを見て、きれいだな、と思った瞬間、ロイドの意識は途絶えた。

「……………はっ！」

直後、正気に返ったサクヤは、恐る恐る周りを見回した。
その眼に映るのは破壊された椅子や机、大穴の開いた天井、散乱する内装のランプ、めくれ上がった床板。

どれも簡単には修理できそうにない損傷である。
そして、

「……………（怒）……………」

背後から猛烈な殺気を放ってくる、マスター。

最早冷や汗を通り越して、涙目になりながら恐る恐る背後を振り返るサクヤ。

「マ、マスター。これはあくまでも事故で、私には過失は…」
「……………（怒怒怒）……………」

さらに高まる殺気。

「ですから、ロイドさんにも責任の一端は…」
「……………（殺殺殺殺殺）……………」

もはや物理的圧力を伴ってサクヤを襲う殺気。

「……………（涙涙涙）……………」
「……………（殺殺殺殺殺殺殺）……………」

言葉を無くし涙目でマスターを見つめるサクヤ。
直後、街中にサクヤの悲鳴が木霊した。

その頃アケミ達は、

「落ち付け！もう奴らは…おわっ！」 アキラ
「いやいやいやや ！」 アケミ
「……………（気絶）……………」 サツキ
「……………（睡眠）……………」 サキ

パニックに陥って魔法を乱射するアケミを、アキラが必死になつて追っていた。

目指せ借金完済！～ウェイトレスサクヤ～4

「ハア…ハア…ハア…。落ち着いたか、アケミ」

「…ええ、なんとかね…」

遺跡内部のどことも知れぬ場所。なんとか追いついたアキラがアケミを必死に正気に戻すまでに、貴重な遺跡が三区画にわたって粉砕された。

「…もう二度と、あんなもの見たくないわ」

まだ青い顔をしたアケミが、口元を押さえて呻くように言う。

「俺もこんな経験は、二度としたくないがな」

暴走するアケミの火焰魔法を食らい、至る所が焼け焦げた装甲服を身にまとったアキラが、疲れ切った口調で言った。

「ン~~~~~!」

「……………」

ついでサキは個人結界を敷いて引きこもり、上半身だけ巻き込まれたサツキは必死に脱出を図っている。

「それより、ここはどこなんだ？」

サツキの脱出を手助けしながら、アキラが疑問を投げかける。

「…かなりの深部に踏み込んだのは間違いないわね…」

周りを見て、アケミが答える。

いつの間にか、周囲の壁の材質は入口の金剛装甲から旧式とはいえど積層ミスリル装甲に代わっている。

「わざわざミスリル装甲を使用しているのなら、明らかに索敵系の魔法防御のためよ。ただの物理破壊に対応するなら、金剛装甲で十分だわ」

「確かに。通信術式が不安定になっているな」

アキラが装甲服のバックパックに積まれているデータリンク術式の起動状況を確認める。すでに通常のリンク4は途絶し、代わりにリンク22が起動している。どうやら通信も妨害されるようだ。

「できれば透過波長を調べておきたいけど、専用の装備が無いとさすがに厳しいわね」

「一応リンク11以上は正常稼働に支障が無い範囲に収まっている。索敵術式はさすがにダメだが、そこは専門家に…よつと…頼もう」

サツキを助け出したアキラが言う。助け出されたサツキは涙目でサキが籠っている結界を殴りつけている。

「サキ！早く出てきなさい！お説教なのです！」

「おい、サツキ。下手に結界に触れると…」

「嫌あー！ー！」

アキラの警告も空しく、結界に触れたサツキは湧きだした粘液に絡め取られる。

「サクヤさんと同じ目に遭うのは嫌です！」

「ていうか、その粘液マジでヤバイじゃない！」

なんとその粘液、床のミスリル装甲を腐食し始めた！
アキラとアケミが慌ててサツキを救出する。

「サツキ、大丈夫！？」

「ふ、服だけです…！」

半裸になったサツキが、涙目で答える。
その間も、床の穴は急速に拡大している。

「ていうか、このままじゃ私達も…！」

「総員退避！」

アキラが切羽詰まった声で全員に叫ぶ。
だが、一步遅かった。

老朽化した床は、謎粘液の腐食のダメージに耐えきれず一気に崩壊する！

四人はそのまま床の穴に真つ逆さまに落ちていった。

「なんか懐かしいわね…。サクヤともよくこんな目にあったわね」
「そうだな」

「サキの馬鹿…！」

「ZZZ…ZZZ…」

「なんなんだ、これは…！」

ガルシアは、目の前の光景に絶句していた。

場所は彼らが入ってきた入口付近。傭兵団は大量のゴキブリ相手に奮闘したが、圧倒的数を前に後退を余儀なくされたのだ。

装備も至る所が破損してしまい、とりあえず態勢を整えるため外に置いてある予備の装備に換装しようと思ったのだ。

だが、その扉は閉ざされていた。

まるで遙か昔からそうであつたかのように堅く閉ざされた扉は、屈強な傭兵達の体当たりなどでも小揺るぎもしない。

どうするか必死に考えるガルシア。

その時、背後からカサコソという先ほどまで嫌というほど聞いた音が聞こえて来た。

「まさか、もう奴らが…！」

すでに退路は断たれた。

数瞬後、剣戟の音が狭い通路に木霊した。

「ん？これは一体なんじゃ？」

レイモンドは、傭兵と分かれた後巨大ゴキブリの群れをかき分け、粉碎し、粉碎しながら遺跡の奥深くまで侵入していた。

その体にはいくつかの擦り傷があるがほぼ無傷で、手に持った槌が魔物の緑色の血で汚れている以外外見の変化はない。むしろレイモンドが魔物だ。

その目の前に現れたのは、うつすらと蒼い光を放つ巨大な水晶の

ような柱だった。

柱は天井と床を貫き、そのまま上下階へとつながっているようであつた。

「……………」

その時、何かの気配を感じたレイモンドは一瞬でこれまでいた場所から飛びのく。

次の瞬間、頭上から巨大な蜘蛛のような魔物がレイモンドめがけて突っ込んでくる！

「ふんっ！」

その一撃を、両手で支えた槌で耐えるレイモンド。

「その程度で、このわしを倒せるか！」

そのまま相手を押し返し、よろめいた巨大な胴体に向かって真横から槌を振りぬく！

だが、

「ぬっ！」

金剛装甲すら粉碎するレイモンドの一撃を、その巨大蜘蛛は八本足で衝撃を吸収して耐え抜いたのだ！

そのまま鎌のような足の一本でレイモンドの頭部を刈り取ろうとする大蜘蛛。

そこで初めて、レイモンドは服の袖に仕込まれた装甲で、攻撃を受け止めた。

「フム…。多少は手ごたえがありそうじゃな」

そのまま腰を落として、これまで見られなかった苛烈な戦意を噴出させながら、レイモンドは魔物と対峙した。

「我が破城の鉄槌、受け切れるものなら受けてみよ！」

死闘が、始まった。

ズンッ…！

「今の衝撃はなにかしら？」

「またレイモンドさんが暴走したんじゃないか？」

そんな話をしながら、アケミ達四人は遺跡の最下層を出口を探して徘徊していた。

ここまで深い区画に潜れば、もうトラップなどはあまり考えなくてもいいので（こんな最下層に敵の侵入を許したら、その時点で終わりである）装甲服はアケミとアキラ二人とも拡張^{マジック・バック}靴にしまつて、普段と同じ格好をしている。

「しかし、この施設は外見こそかなり劣化しているが、中身はそれほど古くなさそうだな」

「そうね。どんなに遅く見積もっても三百年、たぶんここ二百年ぐらいの間に築かれたんじゃないかしら」

きつと放棄する時に、劣化魔法でわざと施設を壊したんだわ。

そんな事を話しながら、ゆつくりと、トラップなどを一応警戒しながら進んでいく。

その時、

「…なにか大きな魔力がある…」

サキが立ち止り、小さく言った。

「本当？私には探知できないけど…」

「いや、サキは魔法研究の専門家だ。我々の中で一番探知に長けているだろう」

さらに、サツキの方も意識を集中すれば僅かに魔力を感じるとい
う。

「これは何かありそうね…。サキ、今すぐ広域探査で座標を割り出
して。私達は白兵戦でそれが終わるまでサキを護衛」
ワイドエリア・サーチ

「了解」

「…（こくり）…」

うなずいたサキは、そのままトンツ、と手に持っていた機杖で床
をつく。

次の瞬間、高密度の魔方陣が現れ、それが一瞬で一つ一つの文字
が把握できないほどに薄く広く広がっていく。

その間、他の三人は周囲を警戒している。

そして数秒。

「…見つけた…」

「ありがとう、サキ。先導してくれる？」

「…（こくり）…」

四人はそのままゆっくりと、サキに続いて慎重に前進を再開する。そして、

「これは…、『言伝石』？」

たどり着いた部屋に安置されていたもの。

それは蒼い光を放つ、巨大な円柱状の水晶のようなものだった。

「…おそらく間違いないだろう。これは最高度の皇室の秘術で時間停止がかけられてるから劣化魔法でも破壊出来なかったんだろっ」

驚いた表情で呟くアケミに、表面を指でなでながらアキラが応えた。

『言伝石』

かつて通信用術式である『電電』が開発される前に、大規模司令部間で使用された高度通信システム。

もとは同じ巨大な魔法石の原石から削りだされた魔法石に暗号化の魔法回路を彫り込み、さらにそれを時間停止魔法で保護して完成する巨大なシステム。

最新の『電電』と比べても圧倒的な通信容量と暗号化による傍受への対策など優れた点は多いが、その設置にかかる費用と移動の困難さから今では廃止された通信体系。

「…これは予想外の大物ね…」

深刻な表情で考え込むアケミ。

これは本来ならとつくの昔に廃棄処分されていなければいけない代物。正確にはここに存在するはずがなかった。

なぜならこれの回収は近衛と陸軍が共同で行い、実際皇室に残された術式の使用記録と照らし合わせて完全に回収された事が確認されていた。

つまりこれは、それを通していない非正規品、もしくはどういう手段を用いたかは知らないが回収から逃れた品だということだ。

「そういえば、西回廊で数基、十年前の戦役での混乱で、司令部ごと放棄されて発見されていない物があると聞いた事がある」

アキラが告げる。

「あ、それ私も知ってます！確か中島中隊長が戦った場所ですよね？」

それを聞き、アケミとアキラがはっとした表情になる。

「確かに、あそこで殿を務めたのは中島隊長の部隊だったわね」

「しかもあそこは今特務部隊に改編されている部隊だぞ。なにか関係しているのか…」

二人とも魔法士官学校の成績は優秀だった。戦史に関してもかなりの知識を持っている。

その時、サキが言伝石に触れて言った。

「…ここになに未読の通信が入っている…」

「サキ、あなたもしかしてこの暗号解けるの？」

「…（こくり）…」

「なら今すぐ解読して頂戴」

「…（こくり）…」

サキは触れたまま目を閉じる。
そして数秒後。

「おお！」

アキラが感嘆の声を上げる。

そこには、言伝石から投射されるような形でひとつの立体映像が浮かび上がっていた。

場所はどこかの室内のようだった。背後に掛け軸が飾ってある事から皇国だとわかる。

そして、そこに一人の老人が現れた。

「……！中島隊長……」

その老人は何やら咳払いやら発声練習やらを始めている。どうやらすでに送信が始まっているのに気がついていないようだ。

「……この人ってホント抜けてるわよね……」

「言うな。こんな狸でも、一応俺達の上官だ」

「なんか馬鹿だよね」

「……（こくり）……」

部下達にボロクソ言われる中島隊長。

しばらくして、ようやく送信が始まっている事に気がついたのか、慌てて表情を整えて、改めてゴホンと咳払いする。

『諸君、これを見ているという事は諸君らは Gondwana 大陸の西の果て、つまり皇国本土からもっとも離れた地にいるという事だろう』『すでに気がついていていると思うが、今回の事の黒幕は全て私だ。やむなき事情があり、諸君らをそのような僻地に単独で送り込んだ事

を許してほしい』

真面目な話をしているのだが、明らかに視線がこちらを向いておらず、間違った方向を向いている。シリアスな空気が台無しである。

『現状で他派閥からの各種傍受に備えるため、この通信では核心的内容は触れないでおく。諸君ならこの事を理解できるだろう』

『さしあたり、最初に向かってほしいのは北の果て『ノルトベルフエン』だ。おそらくそこである程度の事が分かるだろう』

『この通信設備は、皇室が有事の際の亡命拠点として残したものである。おそらく各地に類似の施設があるだろう。そこに私からのメッセージを託してある』

そこで、中島は再度表情を改めて、申し訳ないさそうな表情をした。

『今回の事は、本当に…』

ブチンッ…

そこで映像は唐突に途切れた。

『どうしたのサキ？』

『…石の調子がおかしい…』

その時、真上から大きな衝撃が伝わってきた。

『なんだ？』

答えは、次の瞬間はつきりした。
ドーンッ！

轟音とともに、天井が粉碎されたのだ。

「ゴホゴホ…。ちょっと、一体何なのよ!？」

埃にむせながら、アケミが叫ぶ。

「いや、すまんの。思ったより奴が強くての。勢い余って床を砕いてしまったわ!」

はっはっは!と現れたのは…

「レイモンド! あんた生きてたの!？」

無骨な槌を構えたレイモンドだった。

「あんたのせいで、私がどんな目にあっただか…!」

怒り心頭の様子でレイモンドに詰め寄るアケミ。
しかし、

「…! 危ない!」

直後、アキラがレイモンドとアケミの間に入り、腰から抜いた刀で粉塵の中から振り下ろされた巨大な鎌のような一撃を受け止めた。同時に、動きを止めた相手にレイモンドが槌で強烈な一撃を叩きこむが、その衝撃は残る七本の足で柔軟に吸収され十分な打撃を与えられない。

そのまま相手は一気に粉塵の向こうに消える。

「な…な…な…!」

アケミはその光景を震えながら見ている。正確には、粉塵の向こうに見えた影に対してだが。

「く…く…」

鳥肌を立てながら、ため込んだものを一気に吐き出す。

「蜘蛛……！」

アケミは、蜘蛛も苦手だった。

目指せ借金完済！～ウェイトレスサクヤ～5（前書き）

タイトルと違って、最近サクヤの出番がない…

目指せ借金完済！〜ウェイトレスサクヤ〜5

「おそらくあれは『鬼蜘蛛』の特異種だろう」

半壊状態の遺跡の一室で、アケミとレイモンドを相手に、険しい顔をしたアキラが自らの推測を語る。

「なにしろここはかつて皇国の拠点だったのだ。破棄されたとはいえそれなりの資材が放置されていただろう。それに劣化魔法やなにやらが合わさって、あのゴキ……『G』やさっきの巨大な鬼蜘蛛が生まれたのだろう」

ゴキブリと口にしようにした瞬間、凄まじい殺気がアケミから放たれて『G』と言い換えるアキラ。

『特異種』とは、通常の同種の魔物を大きく超えて成長した巨大個体を指す。大抵魔力が地脈から大量に噴き出す『ホットスポット』やその周辺で発生する。

しかし、今回はこの遺跡に残されていた各種の魔道具の資材と、いまだに稼働を続ける言伝石が奇妙な干渉を起こして、結果としてこのような特異種が発生したのだと思われた。

「ふむ、あのゴキ……黒虫どもは問題ないが、あの蜘蛛は少し面倒じやの」

レイモンドが顎をなでながら言う。

「わしの打撃を受けても、うまく吸収して有効打が与えられん」

仕留めるには剣か魔法がいいじやろう、とレイモンドは続けた。

「それなら私が魔法で攻撃して、とどめをアキラとレイモンドに任せていいわね？」

アケミの確認に、黙ってうなづく二人。
しかし、

「あ、あの……」

これまで会議に加わっていなかったサツキが、恐る恐る手を上げる。

「鬼蜘蛛相手だと、私の索敵魔法では上手く見つからないかもしれないんですが……」

それを聞いて、まずい、という表情を浮かべるアケミとアキラ。
レイモンドは、なにがまずいのか分からず『？』マークを頭上に浮かべている。

実は、鬼蜘蛛や『G』などの昆虫系の魔物は、魔導師にとって非常に面倒な相手なのである。

なぜならば、通常の動体探知や熱源探知の魔法では、じっと待機しているこの手の魔物はほとんど見つからない。待機時のエネルギーの消費が著しく低いためである。

おまけに、防御が紙の魔導師では、前衛職と違い不意打ちの奇襲が命取りになるため、昆虫系が得意とする待ち伏せ攻撃が非常に怖いのである。

そして、これらを防ぐためには魔力を探知する魔力探知の魔法が有力なのだが……

「さっきまでアケミさんが魔法を撃ちまくったせいで、正確な索敵

が出来ないです」

サキも同じだと聞いて、頭を抱えるアケミとアキラ。

「嘘でしょ…。埃が舞って視界の悪いせまい屋内で、鬼蜘蛛の特異種相手とか…」

元々が、巣を張って獲物を待ち伏せする蜘蛛。それとここまで悪条件が揃った場所で戦うのだ。

「…野戦で竜の群れ相手にした方が、まだましかも」

それはお前だけだ！

全員が、ぴたりと息をそろえて言うのだった。

数分後、アケミを中心として、彼らは再度動き始める。
無論、必勝の策を携えて。

「そうよね、発想を転換すればいいのよね！」

明るく叫んだアケミの周囲に無数の魔方陣が浮かび上がる。いずれも一撃必殺の威力を秘めた火焰魔法だ。

背後では、サツキが必死になって回復魔法を唱えて湯水のごとく消費されるアケミの魔力を補給している。

「はっはっは！なんとも豪快だな。いつもこんなのかね？」

「…サクヤがいないと、いつもこんな感じだな…」

愉快そうに話すレイモンドに、乾いた声で答えるアキラ。なんとなく煤けている。

「…三人とも、集まって…」

ここまでほとんどしゃべってこなかったサキが、順調に魔方陣を増設しているアケミ以外の三人に、自分の近くに寄るように促す。

「…ダイヤモンド 金剛障壁…」

次の瞬間、四人の周囲を無色透明の障壁が覆う。僅かな屈折率の違いからその存在が分かる。見た目は頼りないが、二百八十口径の艦載魔導砲の直撃に耐えうる代物である。

その時、とうとうアケミが全ての魔法の準備を終えた。

「みんな、行くわよ！」

そのまま金属光沢を放つ杖を体の前で真横に構え、目を閉じる。

「インフェルノ 火焰地獄！」

次の瞬間、アケミの周囲のミスリル装甲が立っている部分を除き一瞬で蒸発し、高温で急速に膨張した空気が周囲の一切の設備を粉砕する！

火焰はそのまま余勢をかって通路を縦横無尽に駆け巡り、これまでに潜んでいた魔物も含めて一切を焼き尽くす！

絨毯爆撃。

彼らが到った結論はそれだった。

潜んでいるのが見つからないなら怪しい所をまとめて吹き飛ばしてしまえばいいという、作戦というのもおこがましいレベルの大雑把な代物である。

「これは専用の大規模魔法を準備したのかね？」

「いや、ただ単に大威力の火焰魔法を多重展開しただけだ」

ついでに、それだけでもこの国では魔導関係者を呆然とさせるレベルの代物である。同時制御する技量はもちろん、それほどのリリースを持った杖が存在しないからだ。

「…少し危険。もう一層結界を展開する…」

サキが小さく予告して、もう一層障壁を張る。ついでにアケミは自前の障壁に加え、熱の流れを操作しているのでダメージは受けていない。

「だが、これだけ徹底的に焼けば、わしらの仕事はないの」

「…そうだといいいんだが…」

アキラは知っていた。こういうとき、必ず最後にケチがつく事を。

『それ』は自らの獲物が、厄介極まりない作戦を始めた事を認識した。

欺瞞のために十重二十重に織りなしていた自らの糸の壁により一撃はしのいだが、次の一撃に耐えられる保証はない。

すでにその感覚器官には、次の一撃と思しき魔力反応が確認されている。

それは作戦を変更する事にした。

そう、なにも目につく所に巢を張って待ち構えるだけが、彼らの作戦ではないのだ。

靴が奏でる僅かな振動を頼りに、それは次なる作戦のために静かに移動を開始した。

作戦は、予想以上に上手くいっていた。

遺跡の地下全域を焼き尽くさんとするかのような猛烈な火焰魔法のおかげで、当面の強敵である鬼蜘蛛はもとより、それ以外の中小の魔物までまとめて吹き飛ばしてしまえたからだ。

今のところ、怪我人はすっかり焼けたミスリル装甲の上で転んで手をついたレイモンドだけである。いや、普通手をフーフーする程度じゃ済まないはずなんだけど。

「いやゝ、あと少しで大惨事じゃな」

「いや、普通に惨劇になってないとおかしいわよそれ」

明るく笑うレイモンドに、火焰魔法を放ちながらアケミが冷静に突っ込みを入れる。

「それより、サツキは本当に大丈夫？」

基本的に、アケミの魔力タンクと化しているサツキだが、アキラに背負われて調子が悪そうである。

「大丈夫です、ちょっと魔力酔いしたみたいで…」
「「えっ…！」」

それを聞いた瞬間、アケミとアキラが凍りつく。

「ちよっ…、マズイわよ」

「もとはと言えばお前のせいだ…！」

なにやら小声で言いあう二人。

背中ではサツキがだるそうにし、後ろではサキがレイモンドに肩車してもらい無表情に喜んでいる。

はつきり言って油断していた。

だから彼らは気がつかなかった。足元から忍び寄る振動に。

「…！マズイ！避けるのじゃ！」

レイモンドが警告した時にはすでに遅かった。

火焰魔法で半ばめくれ上がったミスリル装甲の下から、凄まじい跳躍力で下層から飛んだ鬼蜘蛛が突っ込んできたのだ。

「キャッ…！」

「クソッ！」

しかし、奇襲を受けながらもアケミとアキラ、そしてレイモンドは即座に戦闘態勢を整え対応する。

破綻は、予想外の所で起こった。

「ふにゃ…！」

奇襲してきた鬼蜘蛛と戦う三人の背後で、魔力酔いが限界に達したサツキがパタリと倒れる。

それを見たサキが、普段の無表情からは想像もつかない引き攣った表情を浮かべ一気に距離を取る。

「…みんな、ヤバイ…！」

小さいながらも切羽詰まったその警告は、戦闘の喧騒の中にいる三人の耳にも届いた。

「…！まさか…！」

隙を見て背後を振り返ったアケミが見たのは、頭をふらふらさせたサツキがゆっくりと体を起こす所だった。

「あははは…なんだが、とっても、気持ちいいス〜〜」

サツキは頬を赤く染めて、とろんとした目をしている。

「こういうときは、パ〜と派手にやりましょう！」

そういうと、自らの周囲に無数の魔方陣を同時起動させていく。一つの魔方陣が二つに分かれ、分かれたものが再び二つへとどんどん増殖する。込められている魔力は計測機器がエラーを起こすレベルに達している。

「そ、総員退避！」

アケミが叫び、それを受けてアキラとレイモンドが全力で鬼蜘蛛を捨て置いて逃走を図る。

だが、全てが遅すぎた。

「いつけ〜〜!」

放たれた魔法のかなりの数が無駄な干渉で光と魔力ノイズを残して消滅したが、残りは周囲に敵味方問わず次々に着弾を果たす。

複数の直撃弾を浴びた鬼蜘蛛は、足を数本吹き飛ばされて床の亀裂に落ちて行く。

そして、

「きゃあ〜〜〜!」

「クッ…!」

「ぬおお　　!」

「……………」

「にやはははは!」

五人も続けて床の亀裂に吸い込まれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2374v/>

飛ばされて西の果て！？～第4274独立魔装小队奮闘記～

2011年12月1日16時59分発行